

いちばんうしろの大魔王
ACT6
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばん・うしろの
大魔王
ACT6


「あれが魔王の実力……」
「アタシのこと、好きになってよ」
「金、金、金！
何かって言えば金だ！」
「払う奴がいるから！」
Buzz(Vo)
Bathory(G)
H.Hammer(Dr)
Venom(B)


『鎮圧だ！』
「このオープンテラスは我ら『ブラック魔王』のものだ！」
「…………」
Mayhem(G)


マジカル☆大魔王 ～メイドは見た！湯けむり洋館痴情～
13 Fri
絢　子
「おおおお、お兄さま…」
セーブ
ロード
設定

いちばんうしろの大魔王
ACT 6

水 城 正 太 郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
ケーナ・ドロンズ
突然現れたけーなにそっくりな少女。幼い頃、孤児院で阿九斗から髪飾りを受け取ったと主張するが……
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。ポシェットから秘密な道具を取り出し使用する。阿九斗をからかうのが大好き。
そが
曽我けーな
落ちこぼれな天然少女で阿九斗に懐いている。お米が大好き。魔法は苦手だが空を飛ぶことと姿を消すことはできる。
さいあくと
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると（再び？）予言された「善良な」主人公。魔王戦争も一段落したところだが彼の困難は続く。
はっとりじゅんこ
服部絢子
阿九斗に想いを寄せる一途で純情なクラス委員長。伊賀出身の忍者娘でカエルが苦手。


江藤不二子（えとうふじこ）
阿九斗に忠誠を誓った黒魔術師にして薬物使い。学園のマドンナとして君臨するが実は陰謀が大好き。
リリィ白石（しらいし）
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。喧嘩っ早く「小さい」と言われると切れてしまう。
三輪寛（みわひろし）
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。阿九斗の発言をいちいち誤解し阿九斗の悪名を高めるのに一役を買っている。

完全に偶然だった。

だれからも期待されていなかった。

偶然に生まれてくる者も、両親に望まれ生み出された者も、一つの命であれば誰かがその子のことを見ている。多くの場合が

歓迎され、ごく少数の例外のみ忌み嫌われる。それでも、生まれた瞬間には祝福を受けている。

しかし、その少女は例外だった。

「検索結果から判明しています。しかし、過去のデータログが存在しません」

職員は上司に告げた。

最高層ビルのフロアすべてを占める執務室。その一角に配置されたデスクを指で苛立たしく叩きつつ、メギスの神殿の主である白石昭は顔をしかめた。

若い頃の無茶を想像させる、妙に鋭い目の持ち主である。彼はコンスタンス魔術学院の卒業生であるリリィ・白

の父。娘の性格からうかがい知る通り、昭のやんちゃぶりは四十を超えた年齢になっても健在であり

たちの間では鉄砲玉だの暴走族だのと言われている。

昭が仕えるメギス神は、文化と芸術の神であり、一般には昭のそれとはほど遠い穏やかなイメージで見られて

いる。神殿はこの高層ビルでなく、緑豊かな自然に囲まれた静かな雰囲気の建物の中にある。昭はいわば実業家であるが、それ

だけに神殿の中では批判が多かった。事務を任されている高位の神官が彼に仕えている。

「なぜウチの家系で扱わなくちゃならんのだ？」

昭は聞いた。が、その理由は自身がよく知ってもいた。秘書はその神託の言葉を繰り返してくる。

「戸籍がない者は、[illegible]はずですが、その少女、どういうわけかメギスの神の祝福を受けていたからです」

「それなのに、過去のデータログがないんだな」

この帝国において、人間は生まれてすぐに神の祝福を受ける。そして、神はその者のステータスをすべて記録する。そして、その行動が正しければ、見返りに魔術や特殊能力という恩恵を与える。それが帝国内の人民に与える神のサービスだ。

もちろん、信仰はそれとは別に管理されている。[illegible]は神とは別のシステムで管理されている。祝福を拒否する者もいるし、外国人はもちろん祝福を受けていない。

その少女は、つい最近起こった魔王との戦いの跡地で一人突っ立っていたという。保護した騎士の言うことには、彼女は言葉をしゃべり、自分の名前もわかっていたが、この地についての知識はほとんど無いようだったとのことだ。

「しかし、彼女がそこに突っ立っていた時からのログは存在します」

神官長は、淡々と告げた。

「それじゃあ、彼女は天から降ってきた天使、とでも？」

皮肉っぽく口調で言ったが、神官長はうなずいた。

「そうかもしれません」

「ありがたいね。救われた気分だ。わが[illegible]選んでいただいて」

「冗談はともかく、処遇を決めてくださいませんと」

補佐官は冷たく言った。

けっ、と呂晶は吐き捨てた。

「処遇も何も、決まってる。内密に処理して扱うしかあるまい。モウファの奴には連絡してあるんだろうな?」

「先程お願いしてあります。向こうからやってきた客人ということに」

モウファは補佐官の交渉の相手である。

「そうか。それなら、後はウチの娘でも任せるさ」

呂晶は椅子に座り直し、背もたれを揺らした。

「娘さん、病院の看護師さんでしたね」

補佐官の言葉に呂晶は、不満げに、しかしにやけつつ、うなずく。

「そうだ。困ったことばかりしでかすがね。先だっての小競り合いでも向こうの奴とやり合ったそうだ」

「お元気でなによりです。しかし、大丈夫でしょうか? この少女のことは、どういうわけか術師たちも狙っているようです。彼女のデータを解析しようとするアクセスが数件ありました」

「噂が漏れるのが早いな。データログの改竄をした者がいると噂になったんだろう。彼女が狙われることもあるだろうが、向こうの監視も娘に任せるよ」

呂晶はデスクのモニターにマナスクリーンを表示、そこにその少女の顔写真とプロフィールを映し出す

ケーナ・ドロンズ。それが彼の名だ。
「娘さんを信用しないわけではないですが、大丈夫でしょうか？　こちらで保護するべきでは？」
執事長にそう言われた団長は、苛立ちを隠さぬ表情で腕を組んだ。
「冒険者しか手がかりがないんだから仕方あるまい。しかし、どうして彼女はコンスタンの魔術師の従者の記憶なぞを持っているんだ？」

１　デートで決戦

「お前らの担任です。仲良くしてくださいね……」

困ったように言ったのは、このクラスの担任、鳥井美津子(とりいみつこ)先生だった。背が高くて、癖(くせ)っ毛で眼鏡の、気弱そうな印象の女性だが、困った表情をしているのは、この一年一組が問題児ばかりを抱(かか)えているからであって、そこにさらに妙な生徒が加わるのか、という、あきらめにも似た感覚に襲(おそ)われていたからだ。

問題児の代表格は、紗井阿久斗(さいあくと)。このクラスの一番後ろの席に座っている目つきの悪い男子である。絵に描(か)いたような不良であるが、生まれつき切れ長の目つきに無愛想な顔をしており、その顔立ち故(ゆえ)に誤解されることも多いが、実際はそんなところにはない。彼は外れたことのない占いより、前世は魔王(まおう)になると宣言された男であり、現世でも魔王になってしまっている。もっとも、紆余曲折(うよきょくせつ)あって、今はまた普通の高校生に戻(もど)っているわけだが、クラスメイトたちにとっては、細かいことはどうでもいい。この世界の破壊者(はかいしゃ)が教室に同居しているわけである。

クラスにはいつも奇妙(きみょう)な緊張(きんちょう)感がみなぎっていた。

しかし、阿久斗本人は、実は至って生真面目(きまじめ)な性格である。クラスメイトから無闇(むやみ)に怖(おそ)れられていることをとても気に病(や)んでいた。

——転校生、僕(ぼく)のことをあまり怖(こわ)がらない人だといいけど……。

阿久斗は心の底から切実にそう思っていた。

「それじゃ、ケナちゃん、入って」

教室へ入ってきたのは、金髪碧眼、天使の無邪気な笑顔が可愛らしい女の子だった。

白兎の目は彼女に釘付けになった。

その可愛い顔のせいではない。彼女の髪に、あの鳥の意匠の髪飾りが輝いていたからだ。

——あ、あれは、僕が孤児院を出るときにけなにあげた……。

つい、立ち上がってしまった白兎に、少女も気づいて目を丸くした。

「あ、アナタは！」

少女は、教壇の横から一番後ろの白兎の席のところまで一気に走ってきて、そのまま首根っこに飛びついた。

「孤児院でのヤクソク、覚えていますか？　アタシ、ケナです！　会いたかった！」

白兎の耳元で、ケナと名乗る彼女はそう言った。

——え？　けなが女？

白兎は思わず、男だと思っていたけなの方を見た。けなもちゃんと彼女の隣に席について、驚いた顔で白兎とケナを見ていた。

「ああ、もう離さない、マイダーリン！」

ケナはそう言った。

ここで例の都市伝説について思い出す必要がある。
都市伝説の内容はこうである。
そこを通るときに一瞬だけすれ違った女の子に、自分の全財産を払って買った髪飾りをあげていたのだ。永遠の愛
を誓って。
そして、その髪飾りを持つ少女こそ、曽我なのはずだった。例のクラスメイト。よく言えば柔和、悪く言
えばぼんやりとした、見ているだけで眠くなってくるような表情をしている。お米大好少女で、
を飛ばすことと、姿を消すことだけが得意な少女。
しかし、今その髪飾りは確かにふたつある。

○

「ど、どうして同じ髪飾りを……。それに僕の記憶を持っているって……」
阿見は混乱して、けなとケナを見比べた。どちらの髪にも、あの髪飾りがついている。高いものではあった
が既製品には違いない。だから、同じものがあっても驚くには値しないのだが……。
——どうして僕の記憶のことを憶えているんだろう？　じゃあ、彼女は僕の……。
「あっ！」
そのとき、けなも立ち上がって、ケナを指した。

阿死緊張した面持ちで、けなの顔を見る。

——もしかして、けなが何か思い出したのか？　それで、このの子っ言ているることをおかしいと

って……。

「あたしとおんなじ名前ね！」

けなは相好を崩した。



阿見けーなの一人称を知っているクラスメイトたちは椅子からずり落ち、阿見けーなに不信の念を抱いた。

――そういえば、今まで一度でも、けーなは僕の名前を呼んだ機会があった記憶がないって……。

「ねぇ、ダーリン。あの子、誰ですか? 馴れ馴れしいですね!」

ケーナはそう言った。

「馴れ馴れしいって、君にとってもクラスメイトじゃないか。それより、失礼だけれど、君の方が馴れ馴れしいとも言えるよ。僕は初対面じゃないのかい?」

阿見が言うと、ケーナはいきなり悲しげな表情になる。

「オー! そんな! 悲しいです! 初対面なんて! 前世でダーリンからもらった愛の言葉だけを心の支えに生きてきたですよ!」

「前世で泣いていた君? 僕の記憶の中では、その君は笑っていたよ?」

「嬉しいとき、悲しいときには、涙を見ることもありますね! ほら、二人の記憶はばっちり同じね! あなたがダーリンですよ!」

ケーナは阿見の胸に顔をこすりつける。

「こ、こら。授業がこれからはじまるんだし……」

阿見が困って声をあげると、先生の怒声が飛んでくる。

「ええい、授業中に何をしている! 転校生といえど、教室に入った瞬間からクラスメイトだ。ここのルールを守ってもらうぞ!」

怒鳴り声(どなりごえ)とともに立ち上がったのは、クラス委員長、服部(はっとり)絢子(じゅんこ)だった。クールで清楚系黒髪美人、美貌(びぼう)の持ち主だが、

やや見た目がきつくて、その性格の頑固(がんこ)さが伺(うかが)える。

ケナは、ちらりと絢子を見て、嫌味(いやみ)というか、悪意のある目だ。

「ダリン。あの子、ダリンのことが好きで、嫉妬(しっと)してるんじゃないですか？　しっ　とそうです

ね！　いや、きっ　とそうですね！」

「人のくせに下らんダジャレを言うな！　そもそも、そのようなことで注意しているのではな

い！　自己紹介(しょうかい)も済んでおらんだろうと、そう言っているのだ！」

絢子は、相変わらずで、怒り心頭だ。

「やはり嫉妬ですね」

ケナは横目で絢子を見つつ、見せつけるように俺の首に手を回す。

「だ、だから、違うと……！」

絢子は、顔を真っ赤にして否定する。

と、同時に俺はケナの腕を優(やさ)しくほどいて、きっぱりと言う。

「そうだよ。服部さんは嫉妬なんかしやしないよ」

「そ、そうだ。だが……いや……。そこまではっきり否定されると、ちょっと……」

絢子はしどろもどろになる。

「ほら、前に行って自己紹介して」

阿比がうながすと、ケナはうなずいた。壇上で一歩前に出て、元気よく手をあげた。

「二年のみなさん、よろしく！　中等部から来たケナ・ドロンズです！　中等部ではガチガチの覇権（はけん）主義と聞いていま

すが、思ったほど悪い人ばかりじゃないっぽいので、このアタシとも仲良くやっていけると思います！」

ケナは無茶苦茶（むちゃくちゃ）な挨拶（あいさつ）をかましました。

○

「知り合いなんですか？　やっぱ」

そう聞いたのは、三輪（みわ）ロシ。阿比の数少ない友達である。いたずらっぽい顔をした小柄（こがら）な少年で、阿比のことを

アニキと呼んで慕（した）っている。

「そう……なのかな？　いや、正直よくわからない」

千賀は壇上で余裕を取りながら、阿比にそう答えた。

「よくわからないって、どういうことっすか？」

「いや、そもそも、彼女が僕の記憶にあるあの子だったとしても、会話したのは一瞬だけさ。この中等部になって再会して

も、やっぱり命の恩人みたいなものなんだよ。だから、本物かどうかって言われても……」

「そりゃあ、そうでしょうね」

「うん。それに、彼女は少し妙なところがある」

「妙なところで、やんすか？」

「うまく言えないけれど、なにもかも不自然に感じるんだよ」

阿形が言ったその瞬間、食堂の端っこで声があがった。

「お！ ここは並ばないといけないんですか！ お金を払う？ 病院のものはなんでもただじゃないんですか！」

ケナの声だった。

見かねて阿形が立ち上がると、それに気づいたケナが手を振ってきた。

「ダーリン！ 助けて！ 食堂のシステムがよくわかりません！」

「困ったことになったのかい？」

阿形が歩み寄る。

と、食堂内が騒然とした。阿形の顔は生徒の間に知れ渡っている。もちろん、悪い意味で。

それまでケナの列の割り込みを怒っていた生徒たちが、ずばっ、と凄まじい勢いで二つに割れて阿形に道を作った。

――いや、そんなに怖がられても困るんだけどなぁ。

内心そう思うが、公共の場ではついつい格好つけて振る舞ってしまうのが阿形の悪い癖である。なるべく丁寧な言葉遣いになるように気をつけて、鷹揚に手を振る。

「外来生徒は学食に慣れていないんです。どうやらお金を持っていなかったようだ」

そう言うと、いきなり数人の生徒が自分の財布から素早くお札を抜き出してケナに差し出した。
――そ、そんな意味で言ったんじゃ、あ……。
しかし、ケナは上機嫌でお札の一枚を受け取った。
「ありがとうございますね！　最初からそうしておけばよかったんですよ！　あ、このＡ定
もらいますね！」
「あ……」
純一は止めようとしたが、ケナはすでに定食を注文していた。
――良くないよな、そういうことは。
知らず知らずのうちに純一は顔をしかめていた。周囲に緊張がはしる。純一の周囲にいる誰一人として動かない。一、の人の輪の端にいる者たちはすでに逃げだしはじめていた。
純一はケナにお金を差し出した生徒に歩み寄る。
可哀想に、その生徒は足を震わせ、顔を強ばらせた。
「ひゃ、ひゃい！　なんでしょう？」
「お金を要求したわけではありませんので、僕からお返しします。彼女は僕がお金を払ってあげるつもりで
したので、お気になさらず」
純一はそう言ってお札を出した。生徒は震える手でそれを受け取った。

「金を払った奴らバカだな。魔法少女らしくて有名なんだから、彼らはいい格好しようとするところを邪魔したことになるんだから」

「ああ、あれで睨まれたぞ。後でまっさきに殺されるぞ、あいつ」

周囲の生徒たちは不安そうにそんなことをささやきあっていた。

――そんなつもりじゃないんだけどなぁ……。

俺は心の中でぼやくが、そのときケナが俺の腕を引いた。男子Aの食べたお盆を持ってきている。

「ダーリン、あっちで一緒に食べようね！　それにしてもこの国の食事っていっぱいお肉が出るんだね！　驚いたよ！　基本的に肉料理はハイソなアタシには似合わないけどね！」

連れだって歩いていく俺とケナを見送りながら、生徒たちはまたも不安そうにささやきあっていた。

「うーむ。なんで女子はみんなあいつになびいてるんだ？」

「そりゃあ、魔王だしなぁ。いろいろすごいんだろ」

「ああなりたいような……」

「なりたくないような……」

そんなやっかみを背にヒロシのいた席に戻ってくると、そこにはけったいなものが座っていた。

「あーちゃん、それにケナちゃん……って言うのも変だから、ドロンズ……ドロちゃんも一緒だったの？」

けなはもしゃもしゃと定食をかきこみながら言った。定食というのは、彼女の強い要望によって作られた新料理メニュ

のことである。主にライスフライ（炊いた米を米粉の衣で揚げたもの）ライスサラダ　ライス

ペーパーの春巻き　ビーフンスープという組み合わせであり、炭水化物づくしの特別メニューだ。Ｋ定食はけな定食あるい

は炭水化物定食と略されることもあると言われ、他の生徒もそれを注文することはできるが、未だに食べたものがいない伝説メ

ニューである。

「一緒というか、そこで彼女が騒いでいたんだよ」

「この学院の食堂、システムがわかりませんね！　炭水化物ないなんて不親切！」

ケナはそう言って、体を定食に向きつけた。そちらはＡ定食だから、ごく普通のものだ。が、おかずの

フライを一口かじり、それからフォークで米を口に運んだ彼女は、不味そうな顔で首を横に振った。

「お！　なんですか、このお米という奴は！　まったくもって食べられたものではありません

ね！　ハイソなアタシには似合いませんよ！」

これに、けなが珍しく椅子をガタッと鳴らした。

「そんなことないよ！　お米はおいしいよ！」

「おいしいって、それはあなたがそう思っているだけですね！　アタシはまずいと思った。

それだけの話ですよ！」

ケナはあっさり否定するが、けなは引き下がらない。

「まずいとかおいしいとかを抜きにしても栄養素があるからいいんだよ。お米は完全食なんだからね！
それだけ食べていれば人間は生きていけるんだよ！」
——いや、ビタミン不足で脚気になるから……。
阿見がひっそりと心の中で突っ込む。
が、それとは無関係にケーナは激しく首を横に振る。
「栄養素があったとしても、ひとつのものだけ食べていればいいなんて思いませんよ！　そもそ
アナタにいろいろと言われる筋合いはありませんね！　アタシはやっぱりパンにしますよ！
ケーナは立ち上がると、もらったお金の残りでサンドイッチを買って持ってきた。それをテーブルに置
と、高らかに宣言する。
「人はパンのみにて生きるのですね！」
——ひどく精神乏しい言葉だなぁ……。
阿見がひっそりと心の中で突っ込む。
が、それとは無関係にけーなは激しく首を横に振る。
「お米は八十八の手間がかかっているんだよ！」
それからも互いに言い合いを続けた。Kは食堂のサンドイッチを食い散かしながら。
「アニキ、ところで、A定食余っちゃいましたね」
ヒロシがケーナが残したお金を指差した。フライが閉じられただけで完全に放置されている。

「……僕でわけて食べよう」

けーなとケーナが言い争う中ヒロシと阿丸は自分たちの食事を続けるだけでなくＡ定食を完食した。二人が箸をおく頃、言い争いのとばっちりが阿丸に降りかかってきた。

「なんか最初に見たときから　ひどく　とても　スペシャルに　パーフェクトに　あなたが気に入りませんでした！　あなたもダーリンに嫉妬していますね！」

ケーナが阿丸の腕をつかんだ。

「嫉妬なんかしてないよ！　あーちゃんは誓い合った友達だもん！」

けーなが机を叩く。

ケーナは皮肉っぽい目でけーなを見た。

「ふふん。友達？　それじゃあ　アタシたちがデートするところを黙って見ておくといいですね！」

「デート？」

けーなが驚く。それを尻目にケーナは阿丸に身体をもたせかけた。

「デートを知りませんか？　彼氏彼女になるかどうかを試すために　男女二人でハイソでロハスな素敵なスイーツを食べさせる　癒し系のお店に行くことですね！　そこでお茶をして　気に入ったら候補なるわけですよ！」

——デートってそんなもんだっけ？　いや　一般的にはそうなのかな？

阿丸はいぶかしむ。

「気に入ったら恋人候補になるって……？」

「そうですよ。どう進展するのかは本人に任されていますが、お茶の後で男性から女性にアプローチをしますね

それがアリかナシか。それが運命の分かれ道」

ケナは自信たっぷりにそう言った。

「今日の授業の後で、デートしましょう！　お店を選んでおいてくださいね！　それは男性の仕事なのですよ！　健全なハイソでロハスなスイーツを食べさせる、恋愛を進展させるようなデートにぴったりの、癒し系のお店ですよ！」

○

「なんだかんだで押し切られたんだけど……」

その日の授業が終わって、寮の自室へ戻った時、ベッドに転がっている女性を目撃した。

柔らかい緑色の髪、水の流れのような、完璧な美しさの顔立ち。芸術家が作った理想の少女の彫刻、といった姿である。が、彼女はだらしなく寝転がって雑誌を読みながら、傍らに置いた袋から菓子を取り出しては口へ運んでいた。美しい姿に似合わず、中年女性の無職者しかしないような態度である。

「そうですか」

ころねはそう言った。彼女は問題児である。魔王になるとされる勇者の監視役として政府から派遣されているのである。

「そうですかって……。それで終わり？」

「個人の問題ですからね。他人が干渉することではありません。そもそも勇者の資格をあなたはおっしゃっていませんが？」

「あ、そうだったね。ええと、勇者になるかどうかはその後の本人が決めればいいらしいから。きっぱり断ろうと思うんだ」

勇者はそう言い切った。

「それはまたきっぱりしすぎですね」

ころねは複雑そうな顔をあげた。

「良く知り合っていないからね、当然交際してある程度の期間付き合ってからの話。急じゃいけないよ」

くそ真面目に勇者は言い切った。こういう性格が彼の長所でもあり短所でもある。

「それならそうと早く言えばいいのでは？」

「ドロンズさんは、デートの後でないと答えを聞かない、と強く言っていてね」

「勇者の行動パターンとしては変ですね。手順を踏みたがっているかのようです」

ころねが分析的に言った。

「だから、ともかく、僕も彼女の無理難題に乗るしかないわけさ。だから、そのハイソでロハスな素敵なスイーツを食べさせる恋人を満足させるようなデートにぴったりの癒し系なお店というのを教えて欲しいんだ」

阿比留は言った。大した記憶力である。

ころねがベッドに座り、阿比留と向き合った。

「ネットでご自分で調べればよろしいのでは？」

「もちろんやってみたさ。でも、どうも感覚がつかめない」

阿比留は検索結果を映し出す。そこに表示されたマナスクリーンに、自分が選んだ喫茶店の情報を映し出した。そのどれもがかなり特徴的な、渋いセレクトだ。夜はバーになるような店、水出しコーヒーのみのこだわり店、座敷で抹茶を飲ませる老舗の和風の内装の装飾にこだわった店など。

「普段使いのデートに行く店じゃありませんね。調べたのにどうしてこうなるんです？」

「ハイソでロハスな素敵なスイーツを食べさせる恋人を満足させるようなデートにぴったりの癒し系なお店の条件をすべて満たすとそうなるんだ。いや、恋人を満足させるような、だけは抽象的でわからないんだけどね」

阿比留は真剣な顔である。

ころねはまじまじと阿比留を見返した。

「前から、あなたは実は馬鹿だと思っていました」

「自覚しているよ。知識も経験も足りないんだ」

丸山先生はさらに真剣な顔になった。
ころねはさらにまじまじと丸山先生を見返した。
「アドバイスをしましょう。デートで言いえば同伴喫茶です」
「同伴喫茶」
意味がわからない、といった様子の丸山先生に、ころねは懇切丁寧に説明しはじめた。
「同伴喫茶は、男女のみ入れる喫茶店です。店内はブースで区切られており、狭く、二人並んで座れるようになっています。フリードリンクのセルフサービスで、ウエイターはいない場合が多いです。店内は薄暗い照明で、照明が落とされており、には他人たちの姿が見えないようになっています」
「それって……」
「そこで性行為が行われていても、他人は関知しません。露出を好む人向けの喫茶店は照明が明るく、ドリンクコー
とプレイルームは別になっています。そちらの喫茶店では、二組の夫婦・パートナーを交換し、互いに見
つけ合いながらの性交渉を好む方が多いです。単独男性を受け入れる店は、ハプニングと称して、突然に親
裸の女性が性行為をもちかけてくる場合もあります。受け入れるか、受け入れないかは、あなた次第」
ころねは、びしっ、と丸山先生を指差した。
丸山先生はため息をついた。
「そうか。直接答える気はないんだね」
「それはそうです。誰が他人の恋路を邪魔したいと思うものですか。それも自分の好きな男性の他の女」

ころねはそう言った。

「え？」

純也はどきりとしてころねを見返した。

ころねは一旦目を閉じた。唇の間から、ファックス用紙のようにじわじわと舌を出してきた。そしてそのままアカンベーを完成させる。

「なんちゃって」

「……毎度毎度からかわれているから、慣れているつもりだったけど、その種の冗談はやっぱりショックを受けるんだよ。いつも……」

純也はうなだれた。

ころねは、さらに両腕を高く上げてから頭の上で指を立てる、ポーズを作って追い打ちをかけた。完全[illegible]

「なんちゃって」

○

翌日の朝からケーナ・ドローンズにまとわりつかれつつ、純也は、[illegible]に苦慮していた。

「ハイソでロハスな素敵なスイーツを食べさせる成功率を上昇させるようなデートにぴったりの癒し系なお店は見つかりましたか？」

「いや、それは、まぁ、まだだけど、なんとかするから」

「甲斐性(かいしょう)なしは困りますよ、ダーリン。でも、きっとダーリンならなんとかしてくれるはずですね！　いや、ダーリンがなんとかできないなら、周囲にいる下の者が命かければいいのですよ！」

ケナはクラスの他の生徒たちを指差した。

当然ながら、生徒たちはいい顔しない。死神の目の前で直接不満や怒(いか)りを口にする者はいないが。

「ダメだよ、そういうことを言っちゃ」

死神はたしなめたが、ケナは素直に受け止めはしなかった。

「おー、ダーリンは下の者に優しいね」

「そういうことじゃないんだよ……」

――わがままというか、純粋な子供なのかな……。

そんなことを考えていると、声が降ってきた。

「内容次第では鎌で斬首するぞ」

死神である。

「あ、部長さん。そうか、斬首があったね。ドロンズさんは、どうしよう？」

死神にそう言われると、ケナは納得いかない顔で口を尖(とが)らせた。

「生徒のことを気遣っている場合か？　君の相手は私くらいしかできないんだから、うまくやるように言
を入れてもらわないとな」

　魔術を教えるこの学院におけるメインの授業、魔術実技の授業である。それは破壊力のある魔術の制御も含む危険な
のだ。純粋に、いつも一人は混乱を巻き起こしている。魔力が有り余っているためだ。

「わかっている。君を傷つけないようにうまくやるさ」

　聞きようによっては気障に聞こえる台詞を何気なく言った。それは彼の悪い癖に過ぎないのだが、純朴な顔を赤め
た。

「ばっ、馬鹿。そんな妙な言い方をするな」

と、その会話を聞いていたケナが横から口を挟んできた。

「はん！　笑わせるね！　ダリンの相手なんかアナタに務まるはずないね！」

「なんだ？　ダリン、ダリンと。学生の頃から散々聞いて見てきたが、貴様の態度についてはそうはいかんぞ。貴族
　帝国の技術を、他国の若者がなめてかかると、痛い怪我をするぞ」

　絢とケナはにらみ合った。

「技術の魔法で舐めてないよ。ダリンとアタシのコンビなら大丈夫って言ってるだけね！」

「それが舐めていると言うのだ。帝国の技術は……」

「この国は、国粋主義。周りの国にひどいと聞いたけど、ホントですね！」

「なんだと？　それならそいつと組んで一度吹き飛ばされてみろ！　それで今日の出来に満足なら、後悔するといい」

綾乃は怒って向こうに行ってしまった。

――まいったな……。

純一は困っていたが、それでも授業はやってくる。

「今日は動物による精密作業の実習によって、細い、小さな物をミリ単位で制御して動かすことを学ぶ

「マイクロ・メーターとそこにセットされた動物の数が限られているから、二人一組になって。去年のようになったら、二人の共同作業も挑戦（ちょうせん）してね」

先生はそう言った。そして、つけ加える。

「時間が余ったら自分の進度でやってね。無理に最後までやらないでいいから」

他の生徒たちの机の上に置かれた木のブロックを動かしているが、綾乃が指差したのは、教卓の真ん中にぽつんと置かれた

だ

「まあ、今日もよくわかっています」

純一は素直（すなお）に教室を出た、が、その後をケナがついてきた。

「ダーリン、がんばろうね！」

「え？　先生は僕にやれって言ってたんだ。君は無理しなくていいよ。綾乃が言ったことを気にしているのかもしれないけれど」

。「大丈夫、ふたりならできるよ！」
ケナは先に立って、校庭の真ん中に兄妹を引き連れて行く。
「できるって、そんなに簡単に言っちゃだめだよ。僕は特にこういう細かい作業は苦手なんだ。不器用って言うのも馬鹿にした
いだけど、缶詰を開けるのにミサイルを使うようなものなんだよ。ほら、みんなも戻ってこいって」
校庭から教室の窓を振り返った。さすがに[illegible]クラスメイトたちがケナに大丈夫と呼びかけている。
それをケナは笑い飛ばした。
「あはは。問題ないね。見つけてやればいいのね。二人の絆を！」
ケナは兄妹の手を取って、机の上に乗っているブロックに向かさせた。
「だから、ダメだって……」
兄妹は言いかけたが、ケナに握られた腕に暖かさを感じて黙り込んだ。
――なんだ？　力が……。
「ほら、[illegible]！」
ケナは兄妹に笑いかけた。
もちろん、兄妹は力を使った気はさらさらなかった。だが、ケナに握られた側の手の先、確かに細く絞られ
たマナの流れが視えていた。

マナは兵器に撒かれており、それが体内に埋め込まれたマナと呼応して、価値が相乗する。体内に溜め込んだマナが大きければ大きいほど制御が難しいのはそのためだ。

また他人の体内のマナに干渉することは非常に難しい。体内のマナは個人の波動を持っており、それが本人の脳波にしか反応しないからだ。

——僕の脳波に直接反応している……？

そうとしか考えられなかった。ケナは他人の体内のマナを操って、集団を制御していた。

他人の驚きは、教室のクラスメイトたちにも伝わっていた。

実験室では、他人たちの周囲の映像を教室のマナスクリーンに映し出した。机に配置された小さなブロックが集団で制御された動きを見ていた。最も驚くものは、透明な樹脂の箱に入れられた、ほとんど粉のような微粒子が、その極小ブロックが

に積み上げられて、壁を作り出していた。

「な、そんな馬鹿な！」

教師の一人が思わず声をあげていた。

○

「驚きですって？」

問い返したのは、江藤不二子。表の顔は学園の女子寮生としてトップの女子寮長、男女問わずあこがれの君である彼女が、裏の顔はリリィに心酔する魔術結社の信奉者である。
そんな彼女の正体を知っている数少ない者のうちの一人、生徒会長のリリィ・白石が不二子の向かい側に座っている。生徒会室に呼び出したのだ。
「そう。表向きはそうなってるけどね。でも、実際のところは魔術師なんだよね」
リリィはかぶった小粋な帽子のつばを指で弄びながら言った。
「魔術師とは穏やかではありませんわね。そもそもこの学園の生徒の中に魔術師などいるはずがありませんわ。怪奇現象を語るなら、また今度にしていただけませんこと？」
不二子はつまらなそうに応えた。そんな彼女の様子を察したリリィは、先程、学園長様のデスクの上に出現させたマナをスクリーンに映し出した。
「これを見ればわかる通り、どうやら魔術絡みの人物のようなんだ」
スクリーンでは、何か細い糸状のものを行き来させているケナの様子が映し出されている。
「こ、これは……！」
不二子は息をのんだ。
「そうだ。どういう術を使ったものか、魔術師のマナを制御することに成功している。これは、つまり……」
リリィは説明を加えようとするが、不二子がそれを遮った。
「わたくしの大事な魔法陣に馴れ馴れしく手を触れるなんて！」
逆上して、髪を逆立て、リリィのデスクを両手であまりバンバンと叩いている。

さすがのリリィも身体をのけぞらせた。

「……いや、そこじゃない。ツッコミどころは」

「はっ！　ほほっ……おほほほ……！　話が決まっているじゃありませんこと！　そうですわ

ね、これは冗談ですわ！」

元子は笑って誤魔化したが、しばらくして俺が言ったことの意味に気づいたらしい。真面目な表情でリリィに向き直

「彼女の体は不死身だとおっしゃいましたよね？」

「そうだ。いきなり現れたとしか思えない。しかも、あの戦闘の跡地で発見されたのだそうだ」

あの戦闘というのは、先だって行われた魔王軍と魔族の戦い、スハラ神を葬った戦いのことである。しかし、そ

の後、その者の記憶から死体の姿が消え、代わりに魔王スハラ神が葬られたと記憶されている。

「そうなると、皆の記憶からあれを生み出した存在と関係があるかもしれないということになりますわね」

元子は腕を組んだ。

「そういうことだ。神と呼ばれる存在、おそらくは創造主なのか、身体を通して現れる、謎の意志」

「あの創造主の存在を確かめるために、わたくしを呼んだんですの？」

元子の問いに、リリィは首を横に振った。

「いや、確かめようったってわからないものはわからない。とっかかりもないんじゃな

ね。ただ、確かめたかったんだ。まさか君が悪さをしているんじゃないかと思ってね」

挑戦的な目つきでリリィは元子を見る。

平子は不快そうに、眉間にしわを寄せたが、リリィの言っている言葉の意味をよく理解していた。

「お疑いかもしれませんけれど、この件は、わたくしが培養していた万能細胞、そしてそれから生み出される動物の研究については一切関係ございませんわ。あの戦いが終わる直前、わたくしは壺を盗まれましたの。お恥ずかしいことですが」

「あの、ゴム人間か？」

リリィは驚いた顔になる。

平子はうなずいた。

ちっ、とリリィは舌打ちする。

「それじゃあ、あいつらがそれを利用して……。いや、それだとやはり辻褄が合わないな」

リリィは独りごちた後、手を振った。

「わかったよ。ありがとう。呼び立ててすまなかったね」

「いいえ、あの人間のことを見られたのは、収穫でしたわ」

「調べるのかい？　まあ、あんまり無茶はやらないでくれよ」

「いいえ、単に闘志が湧いてきましたのよ」

平子は残酷な表情で笑った。

○

放課後になって、紗綾は後ろから呼び止められた。
「阿部さん。実は教えて欲しいことがあるんだけど」
「教えて欲しいこと？」
オウム返しに聞いてから、紗綾は自分を呼び止めた人物が誰だったかに気付いた。
阿部さんだった。
相変わらず、とまとわりついているケナはいない。放課後になって、先に家へ帰ってしまったのだろう。
「私に教えて欲しい、とはまた珍しいな」
そう言って紗綾は咳払いをした。状況に気付いて一気に緊張してきたからだ。
放課後の廊下に二人きり。
そして、考えてみれば、あの戦いで家に背くようなことをしてまで阿部さんについていくと宣言したものの、当の阿部さんとは何も話していない。
「そ、それで、どうした？　改まって」
赤くした顔を気付かれないように、明後日の方に顔を向けながら紗綾は聞いた。
「どこか、デートに使えそうな喫茶店を知らないかと思って」
阿部さんは何気ない口調で言った。
「で、デート？」

綺月は驚いて一歩後退した。
「うん。僕じゃ、あの店がわからない。ころねにも相談したんだけど、妙なことばかり言われちゃって」
「そ、そ、そ、そうか」
綺月は激しくうろたえた。
「大丈夫かい？」
「い、いや、大丈夫だ。さ、さて……。そうだな。駅前の……いや、あそこはデートにはふさわしくない。駅を出て右手に折れて、そこを進み、商店街を抜けて住宅地に入ってもさらに進むと、オープンテラスの喫茶店がある。がパティシエで、隣の店舗でケーキも買える」
綺月が説明すると、祐司は満足そうにうなずいた。
「それなら大丈夫そうだ」
「お前も参考にするのが確実だ。と、ところで、いつ行くつもりだ？」
「明日」
「あ、明日か。そうか」
——いきなりだ。どうしよう……。服装も調べるべきだろうか？ いや、そこまでするのも恥
だ。あくまでさりげなくなくてはならない。しかし、彼女からデートを誘ってきたということは
もうほぼ百パーセント大丈夫なわけで、つまり、余計な心配をせずに普通にしていれば、これは問題ないということ
か。しかし、易々と受け入れてしまっても軽い女と思われるような気がする。本当にそこまで向こうに握ら

てしまうというのも良くない気がする。そうだ、予定が入っていることにして、少し渋ってみるのは

どうだろう？　それで困らせてみるというのも悪くはないか……。

納得ごちゃごちゃと考えたが、意を決してそっぽを向いたままでこう口にする。

「明日は私、ちょっと予定が入っているのだが……。いや、大した用事じゃない。友人とイベントをやるので

いなどと言っていてな。だが、無理でも、というなら、そちらを優先しても問題ない。何ろ、妹い

つもそんなことをしているわけだからな。はは、はは……」

しかし、それは幸っ、たために阿九には聞えていなかった。

「いや、助かったよ。ドロンズさんがハイソでロハスな素敵（すてき）スイーツを食させる恋愛（れんあい）

せるようなデートにぴったりの癒（いや）し系（けい）なお店に行きたいって言ってたもんだから」

無邪気（むじゃき）な笑顔（えがお）で阿九は言った。

納得一瞬（いっしゅん）にして極寒（ごっかん）の世界に落ち込んで、凍（こお）り付（つ）く。

「……ちょ、ちょっと待て。デートって、あの逢引か？」

すると、阿九は無邪気にうなずいた。

「うん、単に頼（たの）まれたからお茶を飲むだけだけれども」

「い、いや……逢引、ちょっと待て……。、様もしかして、あの逢引？　頼まれたから、というだけ

の理由？」

「まぁ、頼まれたから。それでお茶を断るのも変な話。違うかな？　それに、デートって言ってものは、それを気軽にとらえているみたいだし」

「そ、そうか……。そうだな、は、ははは、ははは……」

「だ、大丈夫？　なんかいきなり顔色が悪くなったよ？」

知らぬ間に恋心であるが、純粋なショックに顔を蒼くしてふらふらとした足取りで去っていく兵長であった。

――そ、そうか……。どうして考えつかなかったんだろう。あいつは頼めば簡単にデートくらいはしてくれるんだ……。そうだ、そうだよな。確かにそういう男だものな、あいつは……。

「監視対象者と兵長の個人的な約束、待ち合わせ場所？『喫茶フチン』？日時は……」

地面の影から盗聴していた騎士は、緊張した面持ちで全て聞き受けた。即座に手帳に情報を書き記す。

騎士団の詰め所に、一瞬にして緊張した空気がみなぎった。数人の騎士ばかりが執務を行っていたのだが、誰かが立ち上がって、団長の報告を待ち受けている。

「……了解。準備に全力を尽くします」

全て言い切った兵長は、部下たちの顔を見回した。一様に恐怖の入り混じった表情が彼に、兵長は決然と言い放った。

「内閣府より連絡が入った。魔王の孫娘が本日十四時『喫茶フチン』を明日の正午頃より利用する。住民の生活と安全を守るべく緊急警備体制を開始する！」

オオオ！　と部下たちの雄叫びがそれに答えた。

監視員のところねとてさぼっているわけではない。阿久比の動向は逐一、本部に報告されているのである。

そして、阿久比の異動があった場合真っ先に赴任するのが『コンスタンティノープル』であることの街の騎士団詰所である。

しかし、孤児であり、生活に余裕もなく、寮暮らしの阿久比は滅多に街には出てこない。そのため、彼もこれが初めての

な緊急任務となる。

『喫茶フチン』に連絡！　腕利きの魔族をウェイトレスとして潜り込ませろ！　明日の昼前には給仕の業務を済ませるようにお

しておけ！　警備プランは１Ｂを選択！　魔王様の孫娘様に不安を与えぬレベルにとどめろ！　近隣の住民にも協力を

要請するのを忘れるなよ！　そして何より大事なのは、住民に緊張を悟らせるな！」

隊長は吠えた。

部下たちの手によって、情報は刻一刻と手元のマナスクリーンに表示されている阿久比の姿や、ポインタの示す位置に更新されていく。

そして翌日、隊長にとって最も長い一日となったのである。

。

「あの、先輩、そんなことまでしていただかなくても……」

阿久比は恐縮した。

姿見はカジュアルを着込んだ自分の姿を映している。千香子が服を選んだ場合と違い、コーディネイトは考えられているし、アクセサリーも追加されている。目立ったのは千香子。もともと持っている服は少ないが、千香子が組み合わせを変えるだけで、相当見栄えは大きく変化した。

「いえ、常に堂々とした格好でいていただかなくては。わたくしのあがめる魔王様は」

ほほほ、と笑って千香子は胸元の襟を直した。さらにワックスで髪を整える。

千香子の隣では寧々が待ち構えて、胸元が大きく開いた服の着替えを手伝っているところである。さすがに自身が大胆な服をそうしていると、モデル並みに絵になる。窓の外には多くの生徒たちが集まってきて、中を覗き込んでいた。

「ああ、千香子様もお美しいわ……」

「でも、どうして千香子様は魔王なんかに懸想をしてらっしゃるのか……」

「悔しいけれど、見た目だけは素敵ね。あれで魔王でなければ……」

「いや、魔王でなくても許せない！」

「そうだ！　俺たちの千香子様を……」

「でも、喧嘩じゃ魔王に勝てねぇんだよなぁ」

などと生徒たちは言い合っている。

それを横目に、千香子はばっちり見た目を整えた[illegible]を送り出した。

「さぁ、できましたわ。行ってらっしゃいませな」

優しく微笑んだ千夏子。円城寺は頭を下げて寝室を出て行きつつも、内心いつもと違う千夏子の態度に不審を抱いていた。千夏子が別の男と少しでも親しくするのを許すはずがないのである。

もちろん、円城寺の危惧は当たっていた。円城寺が廊下に出て行ったのを見届けた千夏子は、素早く寝室を抜けると、円城寺の追跡をしたのである。

「そうそう、真夏子さんとデートなんてさせるものですか。相手が妙な謎を持っている容疑者でなければ、即座に地獄に送っているところですわ」

周囲の生徒たちの姿がなくなってから、千夏子は邪悪な笑みを浮かべてつぶやく。

「そうですね、円城寺の謎を確かめたいところです」

唐突に千夏子に答えた声があった。

いつのまにやら千夏子の背後に、ころねが立っていた。

「い、いつのまに、わたくしの背後に……」



「それほど有事でも用事もありませんでしたが？ それに、目立つ顔がある分、敵対勢力に追われるのは当たり前です」
ころねも街に出る気でいるらしい。珍しく乗り気である。
「ええい、面倒ですが、仕方ありませんわね」
孝子はぼやくが、ころねと一緒に見失うまいと尾行を開始する。
と、別の場所に出たところで、孝子はまたも追跡者に遭遇した。
「せ……先輩！ どうして？」
紗綾子が孝子と顔を合わせてうろたえた。
「……こっちが聞きたいですわよ。と言っても、どう考えても目的は同じですわね」
もちろん、目的は尾行である。
結局四人で行動することになった。
同じ頃、尾行対象の二人はケナ・ドロンズと待ち合わせていた。ケナはいかにも体育会系といった活発な格好である。
「そうか、相手があそこまでスポーティなら、もうちょっとラグジュアリさは抑えた方がよかったですかしら？」
孝子は自分のコーディネイトを反省する。それを見た紗綾子はいぶかしんだ。
「先輩、どうしてそんなに余裕なんです？ いつもの様子と違うようですが」
「ほほほ……。ただでデートなどさせるものですか。先程お貸ししたネックレスには、魔術を仕込んであります。その二人がカフェインを摂取すると、酔ったように眠気を催させます。いいえ、もっ

と正確に言えば、自白剤と同じ作用ですわね。人間の本性をさらけだすことになりますわ！」

くくく、と笑う千子である。

純子はさすがに千子から一歩遠ざかった。

「お、恐ろしい……。つまり、悪い千子も、酔っぱらって、人間には嫌われる……。そして、うまくいけ

ば人間の本性がわかる……」

「そういうことですわ。そして、残念ながら、このブレスレットには、それに対する防衛機能がかけてありま

す。純子のネックレスの影響を受けることはありません！」

千子は満足げに言うが、ころねはぽつりとつぶやく。

「どう考えても、失敗して、無茶苦茶になるパターンですね。純子様が千子様に頼るといつもそういうことになる

です。常識ですよ？」

「そんな常識、この世の中にはありませんわ！」

千子が怒鳴る。純子は頭を抱えた。

「ああ、なんでついて来てしまったんだろう……。こんなことなら、ゆう子のイベントにで

も行っておくんだった……」

その頃、デパートのイベント広場では、純子の妹ゆう子は、アイドルの星野ゆりとして、新曲発表会を行っていたのだ

が、その後の展開は純子とは関係ない。

。

《対象の射殺を確認。通過》

駅で人待ち顔をしていたスーツ姿の男が、死神ケーナが通過するとすぐに端末を操作しに行った。時間の問題である。

他にも、婦人や店員、大荷物を持った旅行者にいたるまで、死神の通過を伝える。

しかし、緊張していたのは、生徒たちだけではなかった。

「あ、あれが……」

「噂の……死神……」

街の人々は『コンスタンツ魔法学院』の生徒たちを通じて、死神の顔を知っていた。目撃者の死神の出現を目撃したことがなかったので、街の人々は伝説の悪魔の再現を目撃

けたことになる。

沿道の商店のシャッターが閉まりはじめ、通行人の母親が子供の手を引いて走り出した。道に残っているのは、武装した生徒たちだけとなった。

《しまった。街の人々は伝説の悪魔のことを知っています！》

《それが目的か！　たった今、結界に入った！　悪魔は、協力者と接触するためにこの街に入って来たと！》

《部隊で阻止できるか？》

《結界を張ります！　しかし、結界内は一般人です！　突破された場合の対処が必要です！》

生徒たちは騒然となった。

もちろん、奥田先輩は気づいていた。

――やだなぁ。下の街も有名なのか……。今後あまり街は出歩かないようにしよう……。

閉まっていくシャッター。夕方に物寂しさを感じる奥田先輩である。

「どうしてお店が閉まるですか？　いろいろ買ってもらおうと思っていたですのに！」

ケナはごねる。

「まぁ、そりゃあね。でも、僕はお金ないから、開いていても高いものは買えないよ」

「じゃあ、あそこに銀行ありますね！　銀行でお金下ろせるんでしょ？」

「銀行にお金はあるけど、僕はないんだよ」

奥田先輩は肩をすくめた。

「じゃあ、ちょっともらってくればいいですよ！」

《対象者が銀行強盗を計画しています！》

《銀行強盗を今すぐ止めさせる！》

《急いで！　銀行に対象が潜入した場合は武器の使用を許可する！》

「ダメだよ。そんな犯罪みたいなことを言っちゃ。下品な真似はしちゃいけない」

阿久比が首を振った。
「じゃあ、どうやってお金をもらうんです？」
ケナが不思議そうに聞く。
――どうやら年齢的に常識を知らないだけなんだな。
阿久比は驚き、そして、少し丁寧に説明する気になった。
「普通に働くんだよ。働かない場合は、不労所得が必要になるね。株を買って配当を貰える……。つまり、会社の経営権を手に入れて、その会社をうまくやりくり、成長させてから会社を売却するとか、そういうことくらいだね」
「お！　なんかよくわからないし難しいですね！」
ケナが頭を抱える。
「そうだね。でも、僕もいつかは経営に口を出す形の投資をしてみたいな」
《すでに株を買っている可能性はあるぞ！　ファンドの連中を徹底的に締め上げろ！　顧客に不正を働いていないか
せ！》
《国内の魔法に隣接しているのは宗教関係者！　海外の資金洗浄の線を捜査しろ！》
後場が始まらぬ、大混乱を巻き起こしつつも、阿久比とケナは喫茶『フチン』に到着した。
「いらっしゃいませ」

店長が頭を下げた。この店の店長みは物腰が優雅で、ウェイトレスも客も、すべて装った騎士である。

「よかった。ここはやってた」

冬矢とケーナを先に座らせ、周囲に目を配った。店は落ち着いた雰囲気である。

──これは、やっぱり素性が知られていそうだなぁ。

内心、何があっても大人しくしていようと、心に誓う冬矢である。

一方、尾行していた三人組は、喫茶店の向かいの路地に隠れ、缶ジュースを飲みながら二人を見守っている。

「それにしても、情けないですね。初めてのデートを尾行というのは」

「わたくしたちは缶ジュースですものね。でも、見てらっしゃい。いずれ、悲惨な展開がひろがりますわよ。けけけけ……」

絢子と不二子がささやき合う。

どこか、悲壮さを漂わせている大臣。ころねは気楽なものだ。

「あ、なんだかいい雰囲気になってきましたよ」

緊張しながらも、妙にわくわくしたところねは言って、持っていた大福を袋から出してほおばった。

に物見遊山である。

「お気楽に言いますわね……。そんなに他人のデートをこっそり覗くのが楽しいかしら？」

「その通り」こころねはうなずいた。

「やや」

良い雰囲気とこころねは評していたが、傍から見たら確かに仲の良いカップルにしか見えなかった。

周囲から浮いて目立たないようにしようと心に誓った阿久比は、奇妙なほどに完璧な気遣いをケナに対しても周囲に対して

も見せたからである。

現役高校生でありながら[illegible]するための資金をアルバイトで稼いだ阿久比は、かなり世慣れたところがある。組織な

い、ケナが妙な勧誘をしないように話をつなぎながら交友を決めさせる。派遣会社の働きも経験しているから、メニ

ユーザーが一度に揃わない迷惑な状況を把握しており、それを避けて自分のオーダーも決める。もちろんケナには

が無理して交友を変えたと思わせないように。

その気になればそこまでの気遣いができる阿久比が、普段からそうしないのは、彼が周囲の好意に鈍いか

らに他ならない。逆に、その気遣いができるからこそ誤解も生まれる。現に今、彼の態度はケナの顔をほんのり

と勘違いさせていた。

今の自分の好みにぴったりのスイーツをセレクトされ、その味に合う紅茶からどれかを解説付きで選んでくれる。メニ

ユープレートの扱いもぞんざいでなく、ウェイトレスへの言葉遣いも丁寧。そして接し方は帝国

について、笑いながら学ぶような話をしてくれる。誤解しないほうがおかしい。

「わ、わたくし、あ、あんな風に優しくされたことはありませんわ！」

ハンカチを噛（か）み千切らんばかりである。

「い、いや、先輩、あそこで優しくすると、甘やかしを食（く）います！　それがあいつなんです！　私もそれで何度も！」

妙に騙（だま）され慣れた反応をする節がある。

「いや、これはコーヒーが運ばれてきたら判明しますね」

けけけけけ、と紳士の口の間から笑い声を漏（も）らすところねである。

平然を装（よそお）っているが、あからさまに緊張した面持ちのウェイトレスが紅茶とケーキをトレイに乗せて来る。

《結構大人しくしています。これは、普通の新人なのでは？》

「密（ひそ）かにウェイトレスの役目を演じ時間を稼ぐ。しかし、指揮をとっている真犯人の可能性も出てきた。

《油断するな。怪盗の魔術師は常に物腰（ものこし）は紳士的（しんしてき）だったとされる。どんな所に潜（ひそ）んでいないとも限らない》

「ブルーベリーの、大きなパイのお客様」

ウェイトレスは、両手持ちの皿からケーキと紅茶を並べた。

「さすがダーリンね。ハイソでラグジュアリーでエコなアタシにぴったりのお店。ぴったりのスイーツですよ！」

ケナは上機嫌（じょうきげん）に。

「いや、そう言っても、この体は僕が選んだんじゃないけどね」

「気にしないね！　ともかくダーリン、最高です！」

ケーキを口に運ぶケナは、さらに気分を良くした。

「いい素材を使ってますね！」

「そりゃ、良かった。天国のことはわからないけれど、確かに味はいいね」

[illegible]うなずき、第二段階だ。

ネックレスとブレスレットが鈍い光を放った。

続いて、ケナが緑のカップを口に持っていく。

「来ましたわ！」

「来た！」

「飲みましたね」

、千絢ところねの二人が同時に声をあげた。

効果がきちんと発揮されるならば、ケナのみが自由に飲めるような状態になるはずだ。そして、その通りのことがケナに起こったのを二人は見た。

「ねえ、ダーリン。言っていなかったことがあるの」
食後の飲み物でカップを置いたケナは、さっきまでの元気な様子はうって変わって、暗い声を出した。
うつむいて両手を膝に置いている。そのただならぬ様子に僕は慌てる。
「ど、どうしたの？」
「アタシ、実は、記憶がないの」
いきなりの告白に、僕は戸惑う。
「え？」
「アタシがいつ生まれたのかもわからないし、どうやってここに来たのかも……」
ケナは顔を覆って泣き出した。
「いや、ちょっと待てよ。何を言っているんだい？」
「ごめんなさい。いきなり泣き出したりして。でも、ホントのことだし、ホントのことだと思うと、悲しくなって……」
「自分の記憶がないって、それは記憶喪失とか、そういう……」
僕が問うと、ケナはぶんぶんと首を振った。
「違う、違います……。多分、アタシがつい最近生まれたってこと、わかるんですよ」
「え……。じゃあ、僕の、孤児院の話についても……」
そう言うと、ケナはさらに激しく首を横に振った。

「いいえ！　それはホント。　ホントの話です！　でもアタシにはそれしかない。　それ
か確認出来ないんです！」
さすがに鈍感な人間といえど、これは自分の魔力、あるいは能力と称される存在が関係しているのではないか
と感づく。
しかし、それより重要なのは、自分の目の前で一人の女の子が泣いているという事実だった。
「だから、アナタに会うまでずっと探してた……。　この世界のこと、何もわからないで、それで
でさまよって……あの村の人に拾われて、あなたのところにやっと来た」
ケナは、涙混じりの告白を続けた。
それは胸の内に、心に重く、そして長く響くものだった。
自分も同じ境遇であり、自分の過去のことを知らないという寂しさは理解できているつもりだ。
「大丈夫だよ。　今の僕のことしか知らないなら、僕もこれからいろいろ教えてあげるから」
自分の内心を正直に言った。

「な、なんか泣き上手って奴ですか？　それより、妙な雰囲気になってませんか？」
綾乃が慌てる。
「ああっ！　見知らぬ相手にあんなに優しく……！　その優しさはわたくしだけに向けなければならない
のなのに！」

[illegible]ハンカチを引きちぎった。

「それより、ケナ・ドロンズがさりげなく[illegible]ついて[illegible]していると気がしますが……」

ころねが言うが、[illegible]の[illegible]すでにそんなことを聞いてはいなかった。



「死神は、アタシのこと、好きですか？」

ケナは顔をあげ、潤(うる)んだままの目で死神を見た。

「え……」

死神は動きを止めた。

簡単に答えてはいけないと思った。

ケナはこれまでの行動を照らしても、無垢(むく)な存在なのだ。

「君は、僕のことしか憶(おぼ)えていないから、僕のことが気になるんだろうと思う」

「そういう答えがほしいんじゃないです！　ちゃんと……」

ケナはまた泣き出した。

と同時に、死神の周囲のマナがざわめきだした。

死神の手が意思に反して動いた。

——え？

さすがの死神も驚(おどろ)く。そのようにしようと思ったわけではないのに、手がゆっくりと前に差し出さ
れる。

——僕の意思じゃないのに、手が動いている？

死神の手は優しくケナの頭に乗せられた。ケナが驚いたように顔をあげる。

——これは、ドロンズさんが操っているんじゃないのか？

ケナの腰の鷲の羽根が、その持ち主の明らかにケナに都合の良いように動いていく。頭から下へ降りた羽がその頬を

で、流れた涙を拭き取る。

正にこの瞬間、未来永劫を約束した恋人のように見えた。

「こ、これはまったく度が過ぎている！　き、き、斬る！　あいつを殺して私も死ぬ！」

狩野は錯乱して隠し持っていた小刀を抜き放とうとする。

ころねがどこからか取り出したマジックハンドでそれを面倒くさそうに制しながら、冷静かし

た。

「彼女のマナの流れがケナ・ドロンズから出ていますが……って、まるで聞いていないですね。二人とも

天子は全身の毛を逆立てて、般若のごとき形相に変化している。

「きいいいい！　想定と違いますわ！　こんなはずでは！　しかし、こんなこともあろうか

と、ネックレスには盗聴器を取りつけておきましたわ！　この会話を録音すれば、完全にドロンズは醜

れるはず！　醜態をさらすといいですわ！　ついでに天罰もしてくだされば、凄まじ

い恥をさらすことに！　ふひひひ……くはははは……！」

「もはやわけがわからなくなっていますね」

ころねは冷静に言うが、二人は動きを止めることはなかった。

「ちょいさー！」

俺はかけ声とともに、取り出した制御装置のボリュームを最大に。

男はすぐさま視た。

《嫁の女性は泣いています！　これは、彼女は魔法で脅されていると考えるべきでは？》

《いや。話の内容から察するに、内部のもめ事の可能性……》

そんな会話をしていた騎士たちであったが、現場の監視役であった者たちの会話が、突然に乱れた。

《すまない……。俺の推理が、ちょっと飛躍した……》

《いやっ待ってくれ。こちらもだ。もしや、なんらかの魔術を……》

他の騎士たちも全員が不調を訴えた。堪えきれぬ、というように、次々とだらしなく、身体をだらりと椅子にもたれかけさせはじめる。テーブルに突っ伏す者もいた。

彼らは会議の最中のため、コーヒーを何杯か飲み干している。そのため激しく手の込んだ魔術の影響を受けているのだ。

「すまない……って言っておかなければならないことがある」

上司の男が、悪びれることなく、真っ先に声をあげた。

「俺は実は、お前の嫁と不倫の関係にある！」

衝撃の告白だった。しかも室内中に響き渡る大声の。

もちろんネックレスにかけられた魔術の効果である。

倒された騎士団員は完全に酔いつぶれていたが、それでも凄まじい騎士団の差を大きく開けた。だが、それでも彼らの
きた結果は、それとは比較的に凄まじいものだった。
「騎士団の、最後の騎士団員が渡して横に倒れました！　全員の戦闘不能となります！　しかもそれを受付の高柳蜜嬢が言いきました！」

「やってしまいましたね」
妙に静かにころねが突っ込む。
「い、いけませんわ！　もともとそれほど出力のない装置ですのに……。あの男のカフェインの摂取量が多くて……」
石子が慌てて、手から落そうと装置をいじる。
が……。
ぱきっ。
「あ」
「まぁ、お気の毒ですね。なんという不運なんでしょう」
ころねが、傍観者の口調で言う。
壊れた装置を握ったまま、石子が呆然とする。

「先輩、ここは引分ましょう。学園内部の腐敗が暴けるという効用もあって役立ったと思いこむしかありま
せん」
紛有何か悟ってしまったのか、前向きな発言をはじめる。
「そ、そうですわね。ともかく、ドロンズは粉砕し潰したわけですし」
予算会議、放棄する方向で納得したようだ。
「その代わり、混乱を招きましたが」
ころねが口の間から[illegible]笑い声を漏らした。

喫茶店のオープンテラスは混乱しはじめていた。
「てめぇ、この野郎！　人の女房を！」
「知るか！　黙ってろ甲斐性なしが！　克子さん泣いていたぞ！」
「人の家庭の問題に口を挟むな！　吹き飛べ！　[illegible]ボルケノ・イラプション！」
「やかましい！　せいぜい泣いてろ！　ソード・トルネード！」
テラスの一角が吹き飛んだ。[illegible]激突のせいである。
当然ながら、その騒ぎを聞いていた店長が慌てて飛び出してきた。
《落ち着け！　いや今は待機！　戦闘終了までは、誰が何を言おうと待機しろ！》
「しかし、[illegible]見過ごせと言うんですか！」

顔を真っ赤にして、理性の抑制が効かなくなった酔っ払いが、横から自分に告白した騎士に迫る。

「強欲な女だと思え！、金、金、金、何かって言えば金だ！」

「払う奴がいるから！」

騎士団の団長は腰の剣を抜き放ち、真正面から衝突する。周囲のテーブルが吹き飛ばされ、激しく飛び散る。

「うわっ！」

阿見はレナをかばって、その身体の上に覆い被さる。

背中に激しく椅子が当たるが、その程度は阿見にとっては何の問題もない。

——だけど……。

どう事態を収拾したものか、阿見は思い悩む。どうせ原因の中年の仕掛けた何かだとは思うが、詳細がわからない以上は何の対策ができるわけではない。

——逃げる……と、酔っ払いが追ってくるよなぁ。

そう考えると動くこともできない。

周囲を見回してみると、酔っぱらった騎士たちが激しい喧嘩を繰り広げており、そこに酔っぱらっていない

たちが集まって……。

全く来ない。

——どうして事態を収拾させる気がないんだ？

《隙を突かれました！　魔王信奉者の一団が結界を破壊しました！》
《馬鹿者！　何故そんなことになった！》
《警備隊はその他の施設の警備を受けて、職務がおろそかになっています！》
現場からの報告を受けて、職員達は頭を抱えた。
《何のためらいなんだ！　国民の隠し子を知っているか！》
《国家違反もみ消しの方だってすげぇぞ！》
『喫茶フチン』からはひっきりなしに暴露が響いてくる。自分の家のルールに背かない限り、魔法が違ることはない。そして権力があるから犯罪の証拠をつかむまで他人のライフログを要求することは御法度とはいえ、犯罪あるいは犯罪ぎりぎりの行為が横行していたことに職員達はショックを受けてうなだれた。
もちろん自分の個人的秘密を暴露されたこともある。
《し……信頼できる一部から、個人のことを教えていたのに……。　ええい、そんなことはいい！　早く、魔王信奉者を捕まえろ！》
《い、いえ……それが……》
《どうした？》
《市民が騒ぎを聞きつけてしまいまして……『喫茶フチン』周囲に抗議の集団が集まりつつあります！》
《阻止しろ！　少しでも遠ざけろ！》

大声でわめいた。

外から見ると、そこはまさに地獄絵図だった。

腕の中では、ケナは子供みたいに泣いている。

そのすぐ近くでは、酔っぱらいたちが白目と黒目を交互に出しながら魔法を使った大喧嘩を繰り広げている。

その反対側では『喫茶ブチン』の店長がこの店の破壊をやめさせようと、半狂乱になっている。

さらに外側にいた、酔っぱらっていない騎士は、この店の外へ走っていってしまった。怒りを目にたたえた

たちが押し寄せてきたのである。

――デートに来ただけ……のはずなんだけどなぁ。

さらにその外側から、奇怪な音とともに土煙が迫ってきている。

――なんだろう、この気配……。これならこの間の戦闘の方が楽なくらいだな……。

外から見て内心ぼやく。

「こ、この妙な音は何です？」

紳士が告げた。

見通しはよくない。原因は、すでに街中の人たちの、人混みの中にいる。街中の不祥事を聞き付け、怒って集まった大人である。もち

ろん、野次馬も多いが『喫茶ブチン』の周囲の人波は凄まじい。

その人混みの、後ろの方から、奇怪な音が響いてきている。激しい、楽器とも騒音（そうおん）ともつかない、奇妙な音である。

「形状を分析（ぶんせき）すると、楽器ですね」

ころねが耳に手をやって、音を分析する。

「こんなときに楽器を持ち歩いている人間がいるのか」

紗希が驚き、そちらを見る。

異様な音が大きくなった。

ギャーン！

耳をつんざく轟音（ごうおん）が、周囲の人の列をまっぷたつに割った。耳を押さえた人たちが、音から離（はな）れようと逃げ出しているのである。

「あ、あれは何……」

紗希が目を大きく開いた。

人の列の向こうに、奇妙な姿の男たちが現れたからだ。

数は五人、全員が黒い革を身にまとっている。素肌（すはだ）に革ベルト、あるいは黒いシャツ。銀のドクロのアクセサリーと、そこかしこに打ち込んだ鋲（びょう）が共通のトレードマークだ。

が、それだけならさほどの奇妙ではない。彼は全員、顔を白くペイントしており、黒い化粧（けしょう）を施（ほど）していた。口元は、唇（くちびる）が黒く染め上げられており、奇声を周囲に振りまいている。さらには[illegible]による呪文（じゅもん）に書かれていた。

大きな楽器を持っていた、ツインギターの片方のバンドである。ボーカルの長い黒髪の男が吼えた。

「魔王の御前であるぞ！　頭を垂れよ、下郎ども！」

「な……！」

あまりのことに驚く綺羅ころねの顔を見る。

「悪魔崇拝系ですね。ブラックメタルと呼ばれるバンドです。魔王崇拝を掲げて、退廃的な歌詞を歌っています。もっとも、ほとんどがファッションであのような格好をしているのですが……」

ころねの解説を遮って、天子が声をあげた。

「あ、あれは伝説の『ブラックメタル』『ブラック魔王』」

「知っているんですか、天子さん？　それにしても、大人が集まってレスでもしそうな情けない名前ですね……」

綺羅が呆れるが、天子は真顔でそれを否定した。

「いいえ、名前にまどわされてはいけませんわ！『ブラック魔王』はファッションでやっているバンドではありません。メンバーの全員が神の教えを捨て去った、本物の黒魔術サークル。所属リーダーには逮捕歴あり。メンバーの入れ替わりはすべて逮捕あるいは黒魔術師の内紛による殺害によるものというあれこそのブラックメタルですわ！」

「げ……。それは本物なのですか？」

「ええ……。わたくしとて、黒魔術を使うために神の教えを捨て去っておりません。しかし、心の底からの悪魔崇拝者の魔王の到来を待ちわび、そのために黒魔術を使えなくなっても神の教えを捨て去るのですわ！」

「すると……」

「そう。あの[illegible]魔術を使えるようになっております。スハラ神を退けたという事実もあいまって、彼
の魔王信仰の[illegible]はすでにMAX！」

天才が断じた。

「MAX！」

ピタハウゼンは[illegible]ための神として機能していた。彼は死んだが、どこかにあるサブシステムを[illegible]
せてから眠りについたらしい。その後[illegible]たちは違法魔術を使い続けている。

「そうなると、彼は魔王に会うためにここに……」

『ブラック魔王』の[illegible]をかき分け、『ブラックフチン』に迫る。

マナ駆動の[illegible]『[illegible]』の凱旋は、高らかに[illegible]渡っている。

[illegible]それを阻止しようとはしているが、[illegible]たちを巻き込むような[illegible]魔術を使えず、さらに『ブラック魔王』のファ
ンのゴスロリ少女までもが集まってきて、[illegible]押し込んでいる。

《止めろ！》

という[illegible]も、もはや何の意味もないものになっていた。

『ブラックフチン』のオープンテラス[illegible]ブラック魔王[illegible]た。ドラムセットを据え付け、準備万端となってか
ら、ボーカルが[illegible]頭を下げる。

「我が最愛の使い魔、御拝謁させていただけること光栄に存じます」
その時の死神の格好は、オープンテラスの中央の椅子に座った死神の膝の上にケナを乗せているというものだった。
傍らからは、余裕の態度で周囲に見せびらかしている、と見える。
しかし死神自身は周囲のことを気に掛けている様子はなかった。
ケナの瞳は、一分の変化も無く虚空を見ていたのである。酔っているようではあるが、その体はひどく冷たく、触れているとまるで凍えてしまいそうに感じられた。死神はこの状況に困り果てつつも、なんとかケナを抱きかかえて膝の上に乗せたところである。

「だ、大丈夫？」
死神が問うと、ケナはか細い声で答えた。
「大丈夫、苦しくはないから……。だけど、ねえ……」
そして彼女は死神の顔を向いた。とても哀しげな顔をしていた。
「どうしたの？」
「アタシのこと、好きになってよ」
その言葉は単純であるだけに、純粋で、真っ直ぐに死神の胸に強く突き刺さった。
しかし、その言葉に答えようとするより先に、死神の手がぴくりと動いた。
——これは、僕の意志じゃない……。彼女がやっているのか！

実際に感じたマナの流れが今も体に感じられる。

純夏の手は意に反して、ケナの髪を優しく撫で、その腰に腕をからめた。

「ダメだよ。僕の体を勝手に操っては」

その言葉に、ケナは不思議そうな顔になる。

「え？」

ケナが嘘をついているようには見えなかった。しかし、純夏の体はゆっくりとケナに覆い被さるように動き、結局、顔がケナの頬に寄せられていく。

ケナは不思議そうな顔をした。さすがに、その情報の獲得はできない。

――無意識のうちにやっているのか！

純夏は驚き、体を自分のコントロール下に戻そうと抵抗する。が、少し力を入れた程度では自分の意志で体を動かすことができない。

――こういうことは良くない。彼女にとっても。

ケナの無意識に働きかけようと、純夏は声を大きくする。

「離れて！」

「離れよ！　なんとお冷たい！　我を抱いたことがあったならお許し下さい！」

『ブラック』の魔道書がいきなり正座をかます。

「どうか！　どうかお許しを！　どのようなことでもいたします！」

もちろん何も聞いていない。

契約が成り立っていると『ブラック魔術』の存在が勝手に思いこんでいるだけだ。

「離れ……て？　アナタが近づいてきているのに？」

「君が無意識のうちに僕を操ろうとしているんだ！」

「皆の者、期待を捨てよ！　魔王に期待することが、かえって魔王の負担になっている！　だが、我の願いが届いているということだ！」

「どうしたらいいの……わからない……」

「今まで孤独でいたことが負担になっている。それを取り戻そうとして無理がかかっているんだ」

「魔王様は孤独であられた！　院に監禁され！　ひどい辱めを受け！　しかし皆の者達よ！　魔王様は今そを取り戻そうとされている！」

「……孤独？　アタシが？」

「僕だけを見ていたよね　僕は認めてもらうことだけが幸せだと思いこんでいる」

「その通りです！　我は魔王様だけを！」

「うぉおおお！　なんとありがたい！　魔王様は我をご存知だ！」

「だけど……それは、アタシがアナタを好きだから……」

「知ってるさ。だけど、そうじゃない。本当の僕のことを君はまだ知らない」

「素晴らしい！　魔王様は我に本当の力をお見せ下さる！」

「うぉおお！　神を殺しただけでは本当の力ではないとおっしゃる！　本当の力！　本当の力！」

「本当の……アナタ？」

「焦ることはない。これから少しずつ、記憶を残していけばいい。僕は見ているから」

「そうだ！　これより始まる！　新たな伝説が始まる！」

「人の記憶に残る悪夢！　忘れられぬ悪夢！　魔王様は見ているぞ！　この世界を一瞬も逃さず見ているぞ！」

「見ていて……くれる……？」

「ああ　だから、僕の願いを聞いてくれ　君は無理に周りのすべてを自分の責任にしようとしないでおくれ　そういう気持ちが、僕を縛り付けている」

「魔王様はすべてを捨てよとの仰せだ！　財産を差し出せ！　命を差し出せ！　すべてを捨て魔王を信仰するのだ！」

「うおおお！　来るべき世界のために！　来るべき世界のために！」

「そんな難しいことを言われてもわからない……」

「大丈夫。これからはじめるんだ。まずは落ち着いて」

死刑囚の言葉。ケナはようやく死刑囚の身体を操るのをやめた。それと同時に気を失う。ここで、ようやく死刑囚は顔をあげて周囲の様子を目にした。

「落ち着け！」との仰せだ！」

「我はこの地に腰を落ち着け、来るべき世界のための橋頭堡とする！」

「このオープンテラスは我ら『ブラック魔王』のものだ！　地域一の最大級ライブハウスとする！　どけ！　腰抜けの騎士どもよ！　我らの魔王を讃える演奏を聴け！　そして絶望の淵に沈むがいい！」

『ブラック魔王』は、魔術的な演奏を開始した。

「は……はい？」
阿丸はさらに悪くなった事態を察知するが、時すでに遅し。
《鎮圧だ！　酔っぱらっている間抜けは気にするな！　彼ごと吹き飛ばしてもかまわん！》
店長の号令が響く。
店員たちは攻撃魔法を撃ち込むが、『ブラック魔王』のボーカルは、喉を潰したデス声のシャウトを一閃させてこれを防いだ。
「魔王の御前で、恥ずかしい戦いなどできぬわ！」
《怯むな！　増援が来るまで戦い抜け！》
それから閑静な雰囲気の小さな喫茶店は、修羅場に入った。
爆発、シャウト、ギターの歪み音、まだ続く罵声の応酬、それに伴う誹謗中傷のシュプレヒコール。
憎悪の爆炎が渦を作っている。その中央にいるのは阿丸。ケナを膝に乗せて悠然と座っている。もちろん、どうしたらいいかわからず動けないだけなのだが、傍目には何の動揺も見せずに周囲の混沌の渦を楽しんでいるように見える。
「ああ、なんと恐ろしい……」
「あれが魔王の実力」
「いるだけで周囲の者を混乱させ、周囲を混沌に叩き込むなんて！」

兵士たちがそう噂しているのを綾乃たちは聞いた。
「なんともひどいことになっている……」
綾乃がつぶやいて周囲を見渡した。どうやら騎士団は自分たちの不祥事を隠すために、すべてを魔王のせいにすることにしたらしい。戦闘に参加していない騎士たちが兵士に混じって適当なことを言っている。
「なんと恥知らずな……」
綾乃が刀の柄に手をかけようとするのを、またもころねが制した。
「いいえ、ここは一旦逃げ出すことだけを考えましょう。目くらましがあれば、自分が一人を抜け出して、寺院に戻ります」
「めくらまし？　それなら私が暴れるしかないじゃないか」
綾乃は悔しげに黙り込むが、ころねが不意に口を挟んだ。しかも、妙に落ち着いた声で。
「目くらましなら困りませんわ」
「え？」
振り返った綾乃に、ころねは不敵な微笑を見せる。
「ネックレスに過負荷がかかっていますわ。もうすぐ暴走して爆発いたしますの。お恥ずかしいですわ。おほほ……」
「先生もとんでもない危険なものを持たせていたんですね……」
綾乃は呆れる。
「いいえ、大司教様なら大丈夫と信じていましたもの。ほほほ……」

ネネ子が無茶苦茶なことを言った瞬間、吸血鬼の向いた方向から爆煙が上がった。

「今こそ！」

ころねは手を高くあげて、握った透明のシートを見せつけた。

「透明カバー！　これをかぶった者は周囲から見えなくなります」

「そんな道具なくても」

「早く行ってくださいな。逃げますわよ」

そして、その場から吸血鬼たちの姿が消えた。

そして後は武器が残った。

死者は出ていないが、被害総額はかなりのものになったという。『喫茶フチン』は吸血鬼の聖地として有名になり、崇拝者のたまり場となったあげく、経営が立ちゆかなくなり店主はいずこかへ消えた。そこは今はブラックメタルバンドのみが出演するライブハウスになっている。

〇

「僕はデートに行っただけなんだと思ったけど」

吸血鬼はぼやいていた。

その手前では、二人が大広間で正座している。命子とところねだ。さすがに命子も吸血鬼の事情を聞いたのである。

「済まなかった。私についていながら」

絢子は頭を下げる。と、王子は不快そうな顔で見た。

「私についていながら、じゃありませんわよ。自分だけ良い子になろうとしないでくださいます？」

「ええい！ 王子の我儘のせいです！」

絢子は怒鳴り、王子は媚びるように周囲を見回した。

「わたくしは王子の為のことを思って……わかってくださいますわよね？」

「誰のせいでもありません。同伴喫茶しなかったから悪いのです」

ぼそりとところね

「何て馬鹿なことをおっしゃってるんですの！、大体、監視員ならもう少し……」

「監視員は干渉はしないのです」

「この場合協力するべきでしょう！ 面白がっていたぞ。明らかに！」

「ええい！ 大人もうるさい！」

珍しく兄妹の怒声は一日中、夜遅くまで続いたという。

２　ライスプディングが食べたい

「Hの仕方を教えてくれませんか？」
いきなり阿外ツ眠顔つきで突き出したのは、ケナである。
四体の霊である。しかも、起きたばかりのタイミングで。
阿九比、扉を開けられた音に気づき、ベッドで身を起こしたのだが、そのベッドの上に飛び乗ったのがケナ
だった、という次第。
「え？」
「だから、Hの仕方を教えてくださいね」
ケナはそう繰り返した。
——え……と。
阿九比、心を落ち着かせる。
誘っているわけではないらしい。女性から誘うならもう少し露骨な態度をとるであろうことは不
でわかっていた。ケナの顔は無邪気すぎる。
「この雑誌発見したよ。大人はHで綺麗になる。というわけで、もっと綺麗になりたいので、Hしま
ようね」

ケーナは性生活の解説誌をマーナスクリーンに映し、それを阿見に突き出した。
女性向けファッション雑誌。確かにケーナが言った通りの特集が組まれている。
「読んだのなら……何をするかわかっていると思うけど……」
困りつつも阿見が言うと、ケーナはわかってはいる、という様子でうなずく。
「詳細も知っていますね。しかし、それと実践(じっせん)は大きなへだたりがあるのですよ」
――詳細って、何の詳細だろう……。
「ど、どこまで知っているって？」
何を言ったものか困った阿見は、マーナスクリーンに指をすべらせてページをめくる。
――確かに、具体的なところは書いていないわけか……。
一般誌(いっぱんし)であるから、露骨な表現は避(さ)けられている。漫画的(まんがてき)な表現で、上半身裸(はだか)の男女が描(えが)かれているのがせいぜいだ。
「専門用語が多いみたいですね。わからない単語ばかりです。それも教えて欲(ほ)しいですよ。例えば、フェ……」
危険な単語を言いかけたケーナだが、阿見は慌(あわ)てて言葉を被せる。
「フェ、ルメル。乳製品に注目でも有名ですね」
「そうです。フェ、ルメル。しかもミルクがどうこうと書いてありました。それをしてあげると、男性が喜ぶ言葉ですよ。で、その逆がクン……」
「クン、ダリーニ・ヨーガ。確かに、内容的に混乱させるね。一方は危険だとも書かれているけれど」

「おー　さすがに詳しいですね　みなが阿純はHのエキスパートだと言っていただけのことはありますね」

――そんな風に思われているのか……。

阿純は落ち込みかけたが　ここはそんなことよりケーナをどうにかして追い出すのが先だろう。

「え　と　その……　ともかく　それは朝からやるものじゃないし……」

「え？　これには　一時は目指すことでより綺麗になろうって書いてありますね」

――なんて結婚　まったく……。

「い　いや　そういうことは　結婚した後やるものなんだ」

「大変すね　結婚か書いてありませんでしたよ？　むしろ　他に結婚している相手とすると危険でスリリング

でもっと綺麗になるって……」

――ますますとんでもないな……。

「両方同意ないとダメなの」

「じゃあ　やり方だけでも教えてくださいね！」

ケーナは　ぐっ　と阿純の方に顔を突き出す。

「いや　だから……」

阿純は完全に答えに窮していると　上から声がした。

「話は聞かせてもらいました」

天井近くに設置してある自分用の収納棚が開いて、中からころねが顔を出した。彼女は阿久比の部屋のこの位置で寝ているのである。

——また話がややこしくなりそうな……。

阿久比はそう思ったが、止める暇もなく、ころねはすたりとベッドの前に降り立ち、ポシェットからアブラナの花を一輪取り出した。

「いいですか？　花にはおしべとめしべというものがありまして……」

阿久比の初等教育をくそ真面目な顔ではじめるころねに、これまた真面目な顔でケナはうなずいた。

「おー、それでどうなるのですか？」

「このおしべには花粉が入っていまして、それがめしべに花粉を……」

「あー、もういいから！」

さすがに阿久比は起きだして、ケナところねを部屋から押し出す。

「おー、ダーリン、ひどいね」

「まだ説明はこれからなんですが……」

「勘弁してくれ。そもそも僕は一人で考えたいことがあるんだ」

阿久比がそう言った。それは追い出したいがためのでまかせではなく、本心だった。

「一人で考えたいことですか？」

ころねが問うと、阿久比はうなずいた。

「ごめん、内容の[illegible]だけは放っておいてくれないか？」

「しかし、[illegible]としての[illegible]ですので、どのようなことかは聞いておきたいかと」

そのころねの[illegible]、少し考えた後、[illegible]はこう答えた。

「将来の問題よ。この[illegible]出来るかどうかに関係している」と言ってもいい」

「それは秘密ですね。では、[illegible]誰も入れないようにしましょう」

ころねはそう言った。

「じゃあ、その間Hのやり方をころねから聞いておくね！　後になったらHしにくるからね！」

ケナは元気よくそう言った。

「いや、それはしなくていい。[illegible]……なるべくならしないで欲しい」

[illegible]はそう言った。

ころねが聞こえているはずなのに、何も反応しなかった。

◯

「こういうものを使うと、より[illegible]なります」

ころねが言いながら、ボタンを押すとぶるぶるぶる、震(ふる)える棒状のものをケナに見せる。

ケナはそれを面白そうにぶるぶるさせながら振り回(まわ)した。

「お！　これは傑作になりそうな気がしますね！」

現魔王城の四階にある、その窓の外、芝生の庭。そこにころねとケナは座っていた。話している内容はもちろん、ころねのいい加減な計画。

「ちょっと……不穏なものを持ち出して何をしているんですの？」

そこに顔を出したのは、天子である。



「いえ、秘密のものと言っても、これはマッサージ器ですから」
「……それは確かに。そのようなおもちゃには、大抵がジョークグッズと書いてありますけれども……」
ころねが妙なものを持ち出しているのはいつものことなので、千尋子も特にそれ以上のことは問い質さず、話を
た。
「今晩は千尋もいらっしゃるのでしょう?」
「いますが、今後では千尋には会えないように、と」
「……まだ怒っていますの?」
「いえ、将来のことで重大決断するので、少し考えたいと言っていました。学院をやめるか否か、ということまで含まれた決断と思われます」
「なんですって?」
千尋子も驚く。そして、脳裏に浮かんだ考えをそのまま言葉にする。
「それじゃあ、いよいよ魔法使いになって、わたくしと結ばれるという決断をなさったのですね!」
「さぁ、それはわかりませんが」
ころねの反応は冷たいが、千尋子も聞いてはいない。
「ほほほほ! わたくし本人は、さぁ、わたくしも今後のことを考えませんと!」
「今後のことですか?」

ケナが不本意な言葉を聞いて、抗議するように口を挟む。
「そうですわ、純真無垢なわたくしとの今後のことを考えているのに違いありませんわ！」
「今後のことというのはわからないけど、ダーリンは今後はアタシとHするんですよ」
無邪気なケナは言った。
千早は凍りついた。信じられないものを聞いた、というように頬をひくつかせた。
「な……なんですって？」
「だから、あたしとHするんですね！ 子種を入れてもらって、精液を注入するんですよ！」
ケナはニコニコしている。
「おもちゃもいっぱい使ってもらいますね！ それに、フェ……フェ……なんとかでミルクを注いでもらって飲むから、お肌がつやつやになりますね！」
「な……な……なんですってぇええええ！」
千早は絶叫した。「嘘っ！」とばかりに首を振り、ケナのことをびしっと指さす。
「あなた、いきなり何を抜かしてますの！ あんまりボケたことぶっこいてらっしゃいますと、簀巻きにしてタマゾン川に浮かべますわよ、このスベタ！」
ケナはきょとんとしたままだ。
「お！ なんですか、いきなり！ アタシは今後の予定を言ったまでです！」
「その予定というのが嘘と決まってますわ！ 純真無垢なわたくしの質問に答えれば……」

「ダメですね、仲間に入るなって」

ケナが言うと、子供は血走った目でケナをにらんだ。そして、何かに気づいた、というように手を叩くと、獲物を見つけた殺人鬼の目になり、こうつぶやいた。

「そうですわね、そういうことなら、仲間にあなたを始末すれば、この剣の意志を確かめる必要もありませんわね」

「ちょ、ちょっと、なんですか？」

ケナは身の危険を感じたのか、立ち上がって後ろにじりじりと下がる。

「良いから、殺されてくださいな！　アタシとこの剣の未来のために！」

子供は大剣を振り上げた。

しかし、それより一瞬早く、叫び声と同時にケナは飛び蹴りを繰り出した。反撃を予測しておらず、一瞬遅れた子供は吹き飛ばされる。

「きゃああ！」

子供は地面を転がされる。

しかし、傷は浅い。服の一部が焦げた程度。

「や……やりましたわね！」

起きあがりざまに子供はケナに向け攻撃を返す。

その攻撃をすんでのところでかわし、ケナは慌てて逃げ出した。

「のぉおおお！　一体なんなんですか！」

○

「男子寮（だんしりょう）の方で大変騒（さわ）がしいと思って来てみたが……何があったんだ？」

絢子（じゅんこ）が女生徒とやってきたのは、五十子ケナを追いかけ回しはじめてからしばらくしてのことだった。女生徒は、ころねだけが座っている。

「紗綾（さい）の所有権のことをめぐって、江藤（えとう）本家の子ケナ・ドロンズとの間で抗争（こうそう）が勃発（ぼっぱつ）しました」

ころねは言った。

「しょうがないな。そういうことなら、彼（かれ）に止めてもらえばいいじゃないか」

絢子の視線の先の所有権を指しした。

「いいえ、生徒会長に邪魔（じゃま）するなと言われています」

「……っ困った奴（やつ）だな。何が問題になっているんだ？」

「二人の争いのものは、些細（ささい）なすれ違いですが、紗綾の所有権をこもって考えているのが、決定的かやめるかどうかま

で決め合った生徒会長の判断について、二人で考えたいため、ということが問題視されています」

「それは、本当のことなのか？」

絢子の問いに、ころねはうなずいた。

「はい」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。一体何を悩んでいるというんだ？」
「詳細は不明です。今日も何も言いませんでしたから」
ころねが言った。
——そうか、やっぱり、彼は負担をかけすぎたかもしれない。だが、私も無茶苦茶であってもいいじゃないか……。考えてみれば、彼は普通の奴ならひきこもりになってもおかしくないくらいの扱いを受けている。ここで私が支えになってやるべきか……。
「なにをブツブツ言っているんですか？」
ころねに言われて、綾乃ははっとした。
「い、いや！　ここで慰めて彼といい感じになろうなんて思って……」
そして、自分が思わず口走ってしまったことに気づいて、綾乃は顔を赤くした。
「そうですか。ご自由になさるといいと思いますが、今後では入れませんよ」
ころねが言った。
綾乃は誤魔化すように手を振る。
「いやいやいや！　そんな、そんなことは企んでいない。本当だ。まぁ、まぁ、今後で待……いや、その、自分の人生を止めないとな。ははは……ははは……」
綾乃はその場を離れる。

――考えることを口に出す癖は直らないと……。いや、そんなことはいい。それよりも、二人の喧
を……。そ、そうか。その原因を探れば簡単に止められるな。うん、そうしよう。そのために
は、どうしたら……。そうだ。悔しいが、あの二人、テルスの力を借りれば……。彼女なら、こ
ろねの目をかいくぐって彼の居場所はいることができる。
納得し、ひとりうなずいた。

◦

その二人、テルスは、審査人、緊張した面持ちでいた。
「ふふふふふ……。この真空パック……誰にもあげられないんだから！」
緊張しつつもにやけている。赤いアホ毛がひょこひょこと楽しげに揺れている。
もちろん、曽我も以下同文なのである。
審査人の二人は机に座り、陶器のカップに入った白いゼリー状の食べ物を見つめている。
「これが我が校の、魚沼産コシヒカリで作ったライスプディング！　生産量が少なく、なかなか手に入らない
やっと手に入れたんだから！」
ライスプディング。レシピはいろいろあるが、一番簡単なものは、砂糖を溶かした牛乳でお粥を作り、そ
れを冷やすというもの。その作り方はごく普通の甘味になる。海外ではそれなりに食べられているもの

だが、主食のお米も、この帝国では人気があまりない。

今、ケーナが毎日愛用しているものは、米を完全に溶かし、ココナッツミルクで仕上げるなどして、それなりにデザートとしての完成度を高めたものだが、やはり人気があるとは言い難い。主食としては言うが、別の言い方をすれば人気がないから生産量が少ないだけである。

とはいえ、世の中には何でもマニアがいる。ケーナがいつも閲覧しているお米メーリングリストやら、お米掲示板やら、お米コミュやらでは、絶賛されているメーカーのライスプディングである。喫茶フチンの事実際、ケーナがいなかったのは、これを手に入れるために走り回っていたからである。

「ライスプディングはお米の甘さと砂糖の甘さの調和が決め手なんだよね。でも、これはさらにココナッツミルクの甘さ、さらに果実の甘さが加わり、絶妙なハーモニーを奏でるの！　ふふ……うふふ……べていないのに、もうよだれが……」

ケーナはスプーンを手に取った。

「では、早速……」

その瞬間、寮の扉が開かれた。

「ケーナ、頼みがある！　手を貸してくれないか？」

寮の仲間が部屋に入ってきた。

「ふえ？」

けなはライスプディングに夢中になっていたため、綱の言葉を聞き間違えた。いや、正確には最後の言葉しか好
らなかった。
「けな、頼みがある！……くれないか？」
「……くれないか？」
「ライスプディングをくれないか？」
「ひ、ひぃいい！　いやぁあああ！」
ライスプディングは渡せない。けなは素早くカップを掴むと、目の前に立っている綱に向かって突進する。
「お、おい、何を……」
綱はけなを押さえようとするが、その瞬間けなは左足を踏み出して体を沈め、その状態から左手を利用してそのまま体
に倒した。左手を地に着いても体勢を起こさず、そのまま左足を引きつけつつ体勢を転回。そして、滑るように綱の脇
を駆け抜けた。
「な……！」
綱は絶句した。
魔術抜きでの戦闘訓練では負け知らずの自分が誇る技術である。それが脇を抜かれたのだ。
「こ、これは、古武術の技、縮地」
。縮地とは踏み出した足の爪先の方向に体重を置くことで、数の距離を一瞬にして移動する技である。

けながこれを体得していたとは思えない。ライスプディングへの執着が生み出した奇跡。この場
した肉体の使い方が可能性を選択させたのだ。後の納得もそう語っている……。それはともかく、納得の脳から抜け
た。けなは一目散に廊下を走っていく。

「ちぃ！」

納得も後を追った。もちろん足は納得の方が速い。だが、そう簡単にはいかないことも納得はわかっていた。

「やはり……！」

けなが角を曲がり出るまでに捕らえられなければ、納得の負けなのである。

廊下にはけなの服が脱ぎ捨てられていた。

姿を消されてしまうと、納得としては追跡の手段がない。

「しまった……。いや、それにしても、なんでけなは逃げ出したんだ？」

。

「ここまでくれば……」

けなは男子寮の壁の物陰に隠れた。全裸にカーテンを巻きつけただけの姿である。逃げる途中で、適当な教室か
ら取り外したものだ。

「最近なら、朝比奈ちゃんも追ってはこないはず。さぁ、ライスプディングを食べないとね！　昨

ぬことでお外で食べることになったけれど、屋根の下で食べるライスプディングもまた格別に違いない

し……」

よだれを流さんばかりの勢いでスプーンを白いプディングに突き立てようとした。その瞬間。

どおおぉおん！

けなのすぐ傍で爆発が起こった。

「ケナぁあああ！」

千夕子の怒りの声が響き、続いて千夕子本人が突っ込んでくる。

「えええええ！　どうして！」

けなは逃げ出した。千夕子の叫びはもちろんケナに向けてのものだが、条件反射でけなは

を呼ばれたことになる。

「ど、どうして、先輩まで……」

けなはカーテンを脱ぎ去って姿を消し、ライスプディングのカップを握って逃げる。

「ケナぁああ！　どこに行きましたの？」

千夕子は鬼の形相でケナの姿を探す。

「や、やっぱり、あたしのことを探して……。はっ！　まさか……！」

けなは自分の手の中のライスプディングを見つめた。

「こ、これを手に入れたことがばれてしまったんだわ！　為朝ちゃんに本気で狙(ねら)っていたなんて知らなかった……」

。

「どうして追ってくるかわかりませんね！　放課後Hの時間に入りたいなら天でやればいいじゃないですか！」

ケナは天子から逃げ回りながら、魔法攻撃を撃ち込み、軽(かろ)やかに跳(と)び回る。

「……天……ってのも、ちょっといいかもしれませんわ……って、そんなことできませんわよ！　わたくしだけの時間」

天子も負けてはいない。激しく応戦しながらケナの後を追う。この頃(ころ)には天子も本気になっていた。魔法攻撃を使わず、あらかじめ仕込んで持ち歩いている薬物を入れた小瓶(こびん)を駆使(くし)してケナを追いつめていく。ケナの服をマーカーになる魔法をつけ、その居場所を見つけ出し、魔法攻撃を追尾(ついび)させる。

と、その騒ぎを聞きつけて、生徒たちが集まってきた。

「何？　何？」

「天子様とケナ様が戦ってる？」

「本物が見れるぞ！　あの温厚(おんこう)な天子様が戦なんて余程(よほど)のことだ！」

「罪者か粗相があったに違いない！」
集まってきた生徒たちは口々にそんなことを言い、令嬢に加勢する構えである。
「な、なんでいっぱい集まって来たね？」
ケナはさらに戸惑うが、令嬢はここでいきなり態度を変えた。
「皆様、危ないですからお離れになって！ あの方がいきなりわたくしを襲ったんですの
よ！ しかも卑猥な言葉を叫びながら！ 危険な野獣と同じですわ！」
すっとぼけてしなをつくる令嬢である。
もちろん、集まってきた生徒たちは令嬢の言葉を頭から信じた。
「許せない！」
「なんてこと！ おしとやかな令嬢様に！」
怒りを口にしながら、ケナ包囲に加わる人数が増えていく。昼休み時間のことも手伝い、校舎に残っている生徒たちは連鎖だって
この祭りに参加しはじめている。
「な、な、なんで？ どうして？ 違うね！ でたらめね！」
ケナは抗議するが、誰一人ケナの言い分を聞く者はいない。こうなっては猟犬に狩り出される兎
みたいなものだ。
「いやぁあああ！ どうしてこうなるか！」
ケナはさらに逃げる。

そして、その途中、曲がり角をどちらに曲がったか迷って立ち止まった瞬間。
どんっ！
「ひゃ！」
ケナは見えない何かにぶつかって転んだ。
見えない何かというのは、もちろんけなのことである。
しかし、ケナには痛がって立ち止まる暇はない。追手が迫ってくるのだ。ケナは慌てて走り去る。

「痛た……」
けなも転がってはいるが、ライスプディングのカップだけは落さぬように死守している。
そのため、素っ裸のまま大股開きになっているが、丸見えになっているため、何の問題もない。
「ふ……ふぅ。危なかった……」
けなは、何があった、ときょろきょろしているケナから逃れるべく立ち上がった。
と、そこに大きな筆を持った生徒たちの集団が押し寄せてきた。もちろん、転んだケナを狙ってのことだが、生憎とけなはそんなことに気が回るタイプではない。
「やっぱり、このライスプディングをこんなに沢山の人が狙っているのね！」

けなは強く　確信を持って言った。

「こ、これは　もう　逃げながら食べてしまうしかないかしら……」

ごくり。

唾（つば）を飲み込むけなである。

しかし　ぶんぶんと首を横に振った。

「いいや！　最高の状態で食べないと職人さんに失礼だわ！　これだけの時間がかかった最高のお菓子（かし）なんだもの！」

そしてけなは本気で逃げることにした。

「誰も来ないところへ……。　そうだ！　屋上は出られないように鍵（かぎ）がかかっているところがあった！」

けなは走るのをやめて、空に舞（ま）い上がる。

「屋上で食べるライスプディング！　それはきっと最高に違いないわ！　ああ　白くて　つるつるで、ほんのり甘くて、それはきっと天国で食べているような味！　そうね　それはとても幸せよう！　まるでサンマに大根おろしとスダチのように！　いいえ　別の食べ物のことを考えたら味覚が鈍（にぶ）るわ！　そう　まるで朝露（あさつゆ）とテントウムシのようにぴったり！　できる限り空に近くの！」

けなはうっとりとそう言いながら空に舞い上がる。

「ふう、毎度問題ばかり起こしてくれる」

寮生でもあるリリィ・白石は自分だけが持っている秘密の合い鍵で屋上へ続くドアを開けた。人が来ない広い場所が欲しかったたか

らだ。昨日の商店街の騒動で、近隣の住民たちからの苦情がひどく、さらには騎士団からも突き上げを喰らって苛立

ていた。それを少しでも解消しようと、屋上へ持ってきたサンドバッグを殴りつけて一暴れしようとい

うのである。

飛翔魔法が当たり前の生徒たちだが、〈屋上の立入禁止〉は律儀に守られている。そもそも、屋上へ入ってはいけない、

ということになったのは、先だっての戦闘で屋上に穴が開いたからだ。そこでスハラの神経衰弱死だという

が警備で巡回しており、飛べる者がいたとしても、危険を感じ取って近づかない。

「ふむ、やはり誰もいないな。ここにずっと置いておいてもいいか」

リリィは移動のために持ち上げていたサンドバッグをフェンスから延びているポールにつるした。ぽす

ん、ぽすん、と試し打ちをしてから、ぐいっと振りかぶる。

「大体あの男が街に出てきたのが悪い」

リリィは、どすん、とサンドバッグを一発

ぎしぎしと音を立ててサンドバッグが揺れた。

「それに何があったのか知らんが、生徒会の連中が絡みつく。一部の連中が妙なことをしたに違いない」

どすん　どすん

「それにしても　面白い対応」

どすん　どすん　どすん！

「不祥事（ふしょうじ）を隠すためにうちの生徒のせいにするとは良い度胸！」

どす　どす　どす　どす　どす！

「ああ　いらいらする！　牛乳カルシウムをかじっても間に合わん！」

ずどどどどどどどどどどどどどどどどどどどどど！

リリィは、凄（すさ）まじい勢いでサンドバッグを連打しはじめた。

そこに姿を隠したけなが戻ってくる。

けなは　リリィの言葉の半分くらいしか聞いていなかった。

「牛乳カルシウムをかじっても間に合わない……？　はっ！　今度は牛乳さんまで、このカルシウムたっぷりのライスプディングを狙っているっていうの？　しかもあんなに頑丈なサンドバッグを叩（たた）いて……。よっぽどこれが欲しいんだわ！　それにしても、どうして学園中に広まってしま

ったのかしら……」

けなは屋上の給水塔（きゅうすいとう）の陰（かげ）に隠れた。

○

「あっちですわ、天王寺様」
他の生徒が、次の部屋を指さす。
「あっちに逃げたんですのね」
天王寺たちは階段を駆け上がる。
天王寺たちはケナの服につけたマーカをたどっているのである。しかし、今そのマーカはけなの手
していた。当然ながら、天王寺たちはそんなことをつゆほども知らない。
「生徒会長の部屋」
天王寺たちは部屋の扉(とびら)の鍵がかかっていることに気付く。
「構うことはありませんわ。生徒会長の権限で、次々開けて片っ端からと言うもの。そこに隠れているなら、追いつめ
たも同然ですわ！」
天王寺の言葉に勢いづいた生徒たちは、魔術(まじゅつ)でドアを吹き飛ばした。
どん、という爆発(ばくはつ)音(おん)と共に、ドアが部屋に滑っていく。
「行くぞ！」
天王寺とその取り巻きたちは一斉(いっせい)に部屋になだれ込んだ。その数、今は十人余
「どこだ！」
「出てこい！」

「逃げられないぞ！」
兵士わらわらわらと屋上に拡がる。そのうちの一体が、先程蹴と飛ばしたドアを踏みつけた。そして、そ
のドアの踏み心地が妙なことに気づく。ドアがもぞりと動いた。
「うわ！」
声をあげて飛び退いた。
ドアの下から、のそりと出てきた影があった。つまり、敵は蹴飛ばされたドアの下敷きになって
いたのである。
「おい、これはどういうつもりだ？」
もちろん、ドアを持ち上げて下から出てきたのはリリィ本人である。
額には青筋が浮いている。飢えて人を襲うようになった野良犬すら逃げ出すような素敵な表情で生徒たちをにらみつ
けた。
（唯一の）（[illegible]）この保健室にあって生徒を見張っているのだから、リリィはもちろんなみの生徒ではない。その恐
しさは保健室に知れ渡っている。生徒たちは遊びと思ってイタズラをしかけた相手がヤクザだったときの情けな
った。
「い、いえ……気づかなかったんです。まさか、そこにいらっしゃるなんて……」
「なんだと？　小さくて気づかなかった、とでも言いたいのか？」
言いがかりである。単に自分の背が低いことを極度に気にしているだけである。

「いいえ……そんなことは……。し、失礼しました。僕は細かいことに気が回らない性格ですから……」
その生徒の体操着の上半身までのピンポイントでリリィの急所を貫いた。
「き、き、貴様……」
言っていたことも付け加えて、リリィのその手が、かぶっていた小粋な帽子のつばにかかる。その向きを入れ替えることこそリリィが激怒したことを示すサインなのだ。
「生かしておかんぞ！」
帽子を反転させた。
その次の瞬間、ボールが一度、宙に舞い上がっていた。リリィの手が千手観音のごとくに増え、その一本一本がゴムのように伸びて、一人当たり千発ほどのパンチを瞬時に撃ち込んだのである。
「本来なら貴様ら全員昇天しているところだ。命が助かったな」
リリィがそう言った後、生徒たちは、ざしゃあと頭から屋上に突っ込んだ。
そして、リリィは残った一人の大人をにらみつけた。
「ほ……ほほほ……ちいさ……ちょっとした冗談じゃありませんこと？」
不安そうに笑って、雰囲気を和らげようとした。
さすがの天下の生徒会長も、今度ばかりは喧嘩しないことにしている。
「今、小さいとか言いかけたよな？　ああん？」
リリィは言いがかりをつける。

「ふ……ふふふ……。こうなってはやるしかありませんわね。皆さんも気絶していることです
し、多数の手下が出てきても大丈夫ですからね！」

手下は逃げられぬと見て開き直った。ずばっ、と一息に服を脱ぎ捨てる。その下から現れたのはボンテージ風のスーツ
だ。

「ケルベロス！」

手下が呼ばわると、屋上に疾風のように巨大な犬が現れた。あの、戦闘用の魔獣はなりをひそめたが、手下もこの一匹
だけは可愛がって飼っている。

「てめぇ、こら、楯突くとは良い度胸じゃねぇか」

「成り行きとはいえ、やることになったからには、本気でいかせてもらいますわ！　そうですわ
ね、勝ったら下僕の座について、いただきますわ！」

二人もすでに今まで何をしていたのか、すっかり怯えているようだった。

リリィとケルベロスにまたがった手下が向かい合う。

その間に筋肉が膨れあがる。誰かが合図すれば、同時に二人も動きだすであろう。だが、その瞬間、壊れたドア
から中に入ってきた者がいた。

「先生、ところねとドロンズから聞きましたよ！　何をやっているのです……！」

屋上に現れたのはケーナを引き連れた教頭だった。

紳がケナを追いかけている時、ケナとばったり出会い、事情を聞いたというわけだった。ケナは今のところは、牙がいきなり襲ってきた、としか事情を説明していない。

そんな紳にとってみれば、どうしてリリィと牙がにらみ合っているのかは皆目（かいもく）わからない。

「な、何をしているのですか？」

改めて聞いた。

ところがリリィも牙も、もう喧嘩の細かい理由はわかってはいない。

「ふん、飯のおかずのことでもめたのさ」

これはリリィ一流のジョークである。それに面白半分の牙が乗っかった。

「成長期のお方がどうしても量を多くいただきたいんだそうですわよ。お胸の方が早く大きくなりたいって」

「てめぇ、死んだぞ……今」

リリィの形相がさらに鬼気迫（ききせま）る。子供が見たら一生のトラウマになりそうな顔だ。

「ちょっと待ってください。さすがに見過ごすわけには……」

紳が割って入ろうとするが、それと同時にリリィの伸びる腕（うで）からジャブが放たれた。

ぱしいっ！

紳の額でリリィの拳（こぶし）が弾（はじ）ける。邪魔をするな、という意味合いの意思表示としての一撃（いちげき）である。

しかし……。

「止めるな。[illegible]もボクにかなわなかったじゃないか、キミは」

リリィのその一言に、よろめいてしゃがんだ絢の瞳に、火をつけた。

「……ご主人様……撤回していただきましょうか、その言葉……もう私は、かつての私ではない。今の私はおかずのも

め事やら、思い知らせていただきます！」

絢の神器、すらりと腰のものを抜き放った。一家の家宝である『ソハヤノツルギ』である。スハラ神より超絶

な力を与えられている刀である。神器を引き出し今その力はかなり低下しているが、それでも一流の宝刀である。

マナを一気にブーストさせる機能を今発揮。

七色の輝きが周囲を照らし、絢の身体をマナが覆う。

そのただならぬ威圧感に、リリィも真剣な表情になった。

「いいね、その顔、その力。乗って来てやったよ。ボクも！　さぁ、二人まとめてでもかまわん

ぞ！」

風吹きすさぶコンクリートの丘。見守る生徒たちの中に立っているのは、天才美少女それぞれに、達人級の実力と強力をまと

い、戦闘の中で身体を躍動させる。

絵なる異世界……誰がどうして戦うことになったのかすら把握していないことを忘れれば、だが。

「いやぁあああああ！」

最初に仕掛けたのは、やはりリリィだった。二人同時の攻撃との挟撃、嘘ではなかった。倍増した手数の連撃、二

の太刀を撃ち込んでいく。

「避けなさい！」

牙がケルベロスに命中。その獣（けもの）の鋼鉄の表皮は耐える。矢と轟音、炎の数々の斬撃の前に怯（ひる）むことなく、華麗（かれい）に左右ステップしてこれをかわす。

一方、紬はマナによって分身を作り出していた。激しいリリィの攻撃を受けた分身は霧散。紬の本体はすでにそこにはいない。

「ちぃ！」

リリィは紬の姿を探した。

「セオリーでは……上！と見せかけて下か！」



両刃マナの一流を感じて見切ったのはさすがにリリィである。小ジャンプをして足下を払う攻撃をかわしている。

「これをかわすか！」

コンクリートの床を偽装したシートをマナで作り出してその下に潜んでの攻撃であった。その必殺の攻撃をかわされ、網の紙状態のまま、隙を作ってしまう。

「ふん！」

リリィは拳を下に向けて放とうとする。が、それより早く手が動いた。

「生身の人じゃありませんことよ！」

手から放った鞭の一撃がリリィを襲う。ジャンプしている瞬間を狙っての攻撃であったが、マナで飛翔できる彼

とっては、その瞬間は隙にならない。空中で停止して、鞭をマナをまとった手刀で切り裂く。

「しまった……！　などとは言いませんわ！　わたくしも素人じゃありませんもの」

鞭を切らせたことが、彼女の手段であった。鞭の先端はそこで拡大して伸びる。鞭の先は意思を持ったようにリリィに巻き付く。

「なんだと！　あらかじめ仕込んでおいたか！」

リリィが驚きの声をあげる。胴体を鞭で締め上げられ、その痛みにリリィはうめく。

「ほほほほ！　真正面からやって勝てるなんて思ってはおりませんわ！」

[illegible]勝ち誇るように笑う。

「卑怯な！　道具に頼るとは！　素手で来い、素手で！」

リリィは文句を言いつつ、それでも腕を伸ばすが、肩がつかえない分パンチという速度はならな
い。子犬ケルベロスでひょいひょいと腕の追撃をかわす。
「失礼なんて野蛮なことできませんわ！　それにしてもそのように縛られているのなら　お
胸がしぼられて鞭の間からむにゅりと出ているのは方のサービスとなるはずですのに　あなたの
ではそれもできませんわね　ほほほ」
「うがぁああ！　泣かす！　泣かす！」
リリィはわめき　子犬は笑う
が　その笑いが凍り付いた。
「恥知らずなことを！」
その叫びと共に鞭が切り裂かれた　リリィの身体が自由になる。子犬もそれに驚く暇も与えず　驚くべきことに動ける
ケルベロスの首に立った影がある。鋼の鎧を身にして仁王立ちしていた。
「あなたとはいつかきちんとお話しなければと思っていました！」
「そうね　わたくしもあなたの生真面目さに苛立っていたところですわ！」
子犬は素早く体勢を転ようとするが　ケルベロスがよろめき　子犬は素早くその場を離れなければならなくなっ
た。
「どっちにしろまとめてやっちまうだけだ！」
リリィが拳を子犬に向けて闇雲に撃ち込んできたのである。

「おふざけでないですわ！」
ケルベロスを駆り、天に咆える。
「戦いを望むなら、やってやるだけ！」
剣を分身から作り出し、リリィと不二丸が再び対峙した。リリィは真っ向からそれに応じ、天を戦慄すべくケルベロスを走らせた。
闘気と殺気、激しい感情が入り乱れ、混沌が屋上に出現した。
その様子を見守っていた者が一人いる。
けなとケナである。
隠れて見守っていたけなは、妙な誤解をしていた。
「ああ！　このライスプディングのせいで大変なことになってしまったわ！　夕食のおかずって、これのことに違いないもの！　ああ、どうしたらいいの！　宿敵ライスプディング！　それのせいで二人が屋上で戦い合う！　世界の平和を守らなければならないことがこんなにもつらいなんて！」
けなは悲劇のヒロインのようなことを言い、祈る乙女のポーズで上に捧げあげているのは、その手にしっかりと握ったライスプディングのカップである。
「な、なんでこんなことになったんだか、まったくわからないね！」
一方、絢とともに屋上へやってきて、取り残される形となったケナは、呆然としている。
しかも、ひどいことにはケナの方には、戦いのとばっちりが飛んできた。

「きゃ！」
コンクリートの破片がケナに降り注ぐ。
ケナは手でかばっているが、その額に小さな石が当たる。
「痛っ……！」
ケナが額に手をやった。その指先に血が付く。
「血！ いやぁあああ！ 痛い！ いやぁあああ！」
血に気付いたケナが泣き叫ぶ。
しかし、戦っている三人はそれに気付かない。
さらに、ケルベロスがはき出した炎をリリィが払い、その一部がケナに向かって飛んでいく。
「危ない！」
ケナの体が横に向かって飛ばされた。透明のけなが体の周りを行、炎の飛沫からケナを守ったので
る
「きゃあぁ！」
転がったケナはいきなりのことに驚く。ここでようやく三人が異変に気付いた。
「ん？」
「なんだ？」
「なんですの？」

転がったケナの方へ顔を向けた天使が見たのは、姿を現しはじめたけなだった。

「やめてぇえええ！」

けなは両手を広げて、戦いを止める女のポーズで叫んだ。

「戦をやめて！　どうか！　どうかお願いだから！」

涙を流すけなである。だが、天使の女であるだけに、少女の涙はそれほど弱くない。

「し、しかし、これは本来正そうとしての戦いだ」

天使は口ごもりつつも言う。

「だけど、ドロちゃんが怪我をしているよ！」

けなの必死な説得に天使は黙った。が、天使は首を縦には振らない。

「もとはといえば、その子が態度で問題を起こすのよ！」

リリィも巻き込まれた立場だけに、そうそう矛は収めない。

「いきなり吹き飛ばされて、黙っているわけにもいかないんだよ」

「やめて！　喧嘩の原因はわかっています！　だから……」

けなが膝をついて、前のライスプディングのカップを差しだした。

「これはみんなで分けましょう！　それでいいはず！」

いきなりのその行動に、天使はカップを不思議そうに眺めた。

「……なんのこと？」

「というか……」

「それはなんですの？」

「何を言っているんですか！　これは、ライスプディング！　伝統品種「コシヒカリ」で作った極上の一品、そ
のお米をなめらかに、濾された、ミルクと絶妙なマッチ！　それを食べたものは天にも昇る心地になる
と言う、異界の美味、風味絶佳！　一日のはじまりにはライスプディングを、一日の終わりにもライスプディング
を。かの魯山人もこのように絶賛したという至高のメニュー！　朝食の主菜に、人生の最後に食べたいメニューアンケート
の一位」

けなはうっとりとした表情で説明するが、正直、顔を見合わせる以外することがない。

「らいす……ぷでぃんぐ？」

「食べたことは無いけどな」

「簡単に言えばミルク粥ですわ。甘い味付けしないものは、まさにミルク粥の味ですし、甘いお菓子のように作
ったところで、普通の卵プリンとさほど違うものにはなりません」

冷淡に、平坦に言った。

リリィが、馬鹿馬鹿しそうに天を見上げる。

「あれが原因？　もしかして、そんなもののために星屋のドアを吹き飛ばしたっての？」

「そんなはずありませんわ！　またあの子の馬鹿に決まってます！」

「それはそうでしょうけど……。ああ、なんか馬鹿らしくなってきました」

[illegible]ため息とともに刀を納める。

「またにしておくか……」

リリィも肩を落とした。

「そうですわね。帰っていいですわよ、ケルベロス」

[illegible]ケルベロスを巣に帰して、[illegible]だ。

「よかった！　みんなわかってくれたんだね！　さぁ、食べよう！　みんなで！」

けなはライスプディングを綺麗に[illegible]べく苦慮しはじめたが、[illegible]ぞろぞろとその[illegible]ていく。

「とりあえずお疲れ」

「お一人でどうぞ」

「どうしても食べたければ[illegible]買からいいわ」

そう言われてきょろきょろするけなである。

「え？　じゃあ一人で食べていいの？　あ、でもドロちゃんは[illegible]よね？」

けなは泣いていたはずのケナの[illegible]、ケナは無邪気に目を輝かせてライスプディングを見ていた。[illegible]みたいに純粋なところがあるケナである。どうやらけなの[illegible]ら信じたらしい。

「そ、そんな素晴らしいものを分けてもらえるなんて！　いいんですか[illegible]？」

「うん、いいよ。一緒に食べよう！」

けなとうなずきあうケナである。
と、そのとき、部屋にまた別の人影が現れた。
「あれ？　騒ぎがあるみたいだから来たんだけど、大丈夫だったの？」
開け放たれたドアから顔を出した。帰りかけていた絢子とリリィは驚く。
「あ」
「高見沢」
「何しに来たの？」
リリィには関係ないことだったが、絢子はふと、そこで最初の喧嘩の原因を思い出した。
「お、おい、将来のことで悩んでいると聞いたぞ！　何故相談してくれなかった？」
「高見沢さん、わたくしとの幸せな将来を考えてくださったのね！」
絢子は高見沢の前に殺到した。
すると、高見沢は困惑しながらも詫びる。
「え？　何か誤解を与えたのならすいません。ちょっと一人で考えたいことがあったもので。それだけのことなんですよ」
「考えたいこと？　将来の大事なことって聞きましたけれど？」
「いや……ほら『喫茶フチン』の店長さんにはやっぱり申し訳ないなって。僕のせいで店を潰してしまい、さらに失職させてしまうかもしれません。そこで僕がお金を返そうと思って」

「しかし、服部家は裕福なわけではないでしょう？　かなりの多額になるのでは……」
「ですから、ここを卒業して働く際の給金の前借りを服部家にお願いしようかと思っています。そうしないと僕の気が済
ませんし。一人で考えつつ、僕なりの返済計画を作っていたんです」
「そんな！　服部家にいる人を働かせるわけにはいきませんわ！　そういうことなら、わたくしが払ま
す！　一億でも二億でも！」
千春は晴人にすがりつくようにしながらそう言った。
と、絢子もそれに対抗するかのように、大きな声を被せてくる。
「そ、そういうことなら、責任は私にもある。私の家がそのお金を出してやってでも……」
張り合う二人に、晴人は首を横に振った。
「いや、考えたんだけど、やっぱり僕は学生だから、親のお金に頼ることになってしまう。しかし、
そういう家の名がついたお金は、内心使いたくないんです。自分のことも、服部家に頼ろうとしたことも
のひとつだと思っていますし」
「そ、それじゃあ……」
「僕が稼ぐとか、宝くじで手に入れたお金でもない限り、結局は誰かの名前がついてしまうでしょう？　あくまで僕な
とかしたのでなければ」
晴人はそう言うが、千春も絢子も引き下がらない。
「いいえ、それならわたくしが秘密のお金を集めてまいります！」

、「貴族はそういう汚いお金は誰も受け取りたがらないと思いますけど」
「何をおっしゃるの！ 親に出してもらうお金よりマシでしょうに」
「それはいいですけれど、お金を払うってことは、喫茶店を支えることにした責任が自分にあるとお考えなんですね？」
「それは言いがかりですわ！ あれは、あくまでケナ・ドロンズが悪いんじゃありませんか！ そもそも、あの日は、ドロンズがふざけた態度をとったからであって……」
「それです！ ドロンズをいじめていると聞いたから、私はそれをやめさせようと……」
王子と貴族はまたも一触即発の雰囲気。
気弱に困った顔になる。助けを求めるように、その場の責任者でもあるリリィの顔を見たが、彼女も面倒くさそうに手を振って、やってられん、とばかりに、そそくさとその場を離れてしまう。
なおも王子と貴族が言い合っていると、そこに割って入ってきたのは、制服の上着を裸の上に羽織っただけなだった。
「喧嘩はダメ！ ライスプディングをみんなで食べれば、すべて解決。それで仲良し！」
メチャクチャなことを言うケナである。
王子と貴族は相手にしようとはしないが、ふと見ると、ケナがおとなしく分けられたライスプディングを食べていることに気付いた。
「お！ とてもおいしいですね！ パンでなく、ライスであってもおいしく食べられる料理があるなんて！ これは確かに素敵です！ 仲良くなれます！」

ケーナはそんなことを言っている。すでにHのこともすっかり頭にないらしい。
そういえば、けーなが裸に上着を着ているのはケーナの作業着。仲良くなって借りたとしか思えない。
「ほら、仲良し！ すごいおいしいんだよ。だから食べてみてよ！」
カップとスプーンを突き出された絢子は、無言で一口ずつ口に運ぶ。
そして天人も異様に顔をしかめた。
「……こう言っては何だが、微妙な味」
「いいえ。これは、はっきりと、まずい食べ物ですわ……」
「え？ おいしいよ？ ね？ ね？」
けーなは最後に一口だけ残ったカップを阿九斗に渡した。
阿九斗は悩んだ後、一口そして、首を振った。
「申し訳ないけど、不思議な味だね……。あれ？」
阿九斗は食べ終わったカップの底に、文字が書いてあるのを発見した。
「あたり？」
確かにカップの底には、あたり、の文字があった。
「あ！ やった！ あたった！」
けーなが喜びの声をあげる。

「このライスプディングが人気なのは、あたりくじをつけているからでもあるんだよ。めったにあたらない代わりに、賞金がすごい高いんだよ」

「賞金？」

「うん。あたりが出ないと、累積（るいせき）するから。確か、今は十万」

あっさりとすごいことをけんなは言った。

納得する周囲をよそに、けんなはカップを乳児の手に握らせた。

「運良く手に入れたお金ならいいんでしょ？　よかったね。最後に食べたのあっちゃんだから、あっちゃんのものだよ」



さすがの日向丸もぽかんとしている。しかし、けなは満足したものだ。

「ほら、ライスプディングで有名になったでしょ？　だから、ライスプディングをみんなで食べよう！」

。

その後、その噂を聞きつけた生徒たちの間で、ライスプディングが大流行することになった。

しかし、有名ライスプディングを食ることができた生徒はおらず、けなとケナは完大けライスプディングを食ることができる者として重宝された。

かなりの数のライスプディングが板肉に持ち込まれたが、結局誰もあたりをひくことはなく、ゴムは

ぎ去った。

「幻のライスプディングとは言けれど……」

日向丸新紙店共あたりのカップを喫茶フチン『届遂ることができた。そんな恩恵を受けていて言の

も問題は恩が……。

「……まずいから幻し、発覚標準たんだよな？」

３　幼女は気難しい？

けなとケナの距離は、ぐっと近づいたようだった。ライスプディングのおかげとい

か、なんというか。

仲良くなったのは阿久斗である。ケナが阿久斗にまとわりついてくる時間がぐっと減った。それでも騒動が

たわけではないのだが。

「ドロちゃん、これは昔話にあった話を本にしたものだよ」

「そうなんですか！　勉強になりますね！」

けなは最近ケナに本を読み聞かせることにはまっている。ケナは頭から本の内容を信じ込んでしまう素直な性

のである。

――今度は何を読み聞かせているんだろう？

阿久斗は気になって横から覗き込むと、そのタイトルは昔の超能力ものの娯楽作品だった。宇宙から悪の組織が攻

てくるので、それに対抗して超能力者がネットワークを築いて対抗するとか、そういう話。

――少なくとも事実ではないよなぁ。

しかし、ケナは、まずは本に書かれていることを全部信じ込むようだった。この場合けなも全部信じてい

るので、[illegible]

「執拗に狙われているんですね！」

「そうだよ。[illegible]でいないと、取り憑かれて大変なことになるんだよ」

ケナとけなはうなずきあっている。

転校してきた時、ハイソだなんだと言っていたのは、どうやらその手の雑誌や情報から信じた結果らしい。

っぱらったときのケナの言語からすると、彼女は[illegible]した際、得体の知れない[illegible]を持参して雑誌に与えた者がいたのだ

ろう。

ともあれ、最近[illegible]ケナが読んだ本の影響をそのままに受けてしまうことに周囲で困るものが多かった

た。探偵ものに凝ったときは、他人の身辺を勝手に調査して、その結果[illegible]隠し事を暴露してしまい、大変なことにな

ったくらいだ。

――まぁ、[illegible]――ものなら問題少ないか。

「この本に書いてある取り憑かれている者の特徴からすると、美津子先輩は邪悪な悪魔に取り憑かれている可能性があ

りますね！　粛正が必要です！」

[illegible]困ったものである。

「それは日本の昔話じゃないよ」

[illegible]横から口を挟む。

「ええっ！」

心底驚いた、という顔でケナが目を丸くする。

「だめだよ、あーちゃん。本は、本の中のこととして読まなくちゃいけないんだよ？」

けーなが文句を言った。

「それじゃ、フィクションが成り立たないよ」

阿光が笑う。だが、けーなは首を横に振った。

「違うよ。本はその本の中の独自の世界を作り出すものだよ。だから、現実の知識を本に持ち込まないというのが、読書のマナーみたいなものなの。いちいち、知識で読み取ろうとして、本で読んだことを現実で役立てようというのは、とって

らしいことだよ？　現実の知識で本のお話を馬鹿らしいというのは、それと同じ事だからね？」

口調はおっとりとして馬鹿っぽいが、言っていることはそれなりに難しいことである。

――そういえば、けーなは性格はダメだけど、勉強の成績だけはいいんだった。

阿光は感心してうなずいた。

「なるほど。そういうことなら、僕も思った。でも、それなら、ドロンズさんがこの家の本の

ことをしないように注意しないと」

「それは、段々と覚えていくから大丈夫だよ。ドロちゃんは良い子だもの。最初から斜めに読む読み方を覚えたら、純粋な本が

ない子になっちゃうよ？」

無邪気に笑うけーなである。

「それにしても、二人とも本が好きだね」

阿光が言うと、二人はうなずいた。特にケーナは強くうなずいた。

「お話、面白いです」

最近では、一本と言っても、データ化されているものがほとんどだ。世界中からアクセスできるネットワーク

だけでも、膨大な数の書物を閲覧できる。しかし、それは過去の出版物が増えたばかりではなかった。販売もあるだけに、

データを蓄積しようという欲求が湧かないのである。特に小説などは生まれていく上で必要なものだ。そのため、

と違って、過去へ遡って参照する必要性もあまりない。

最近の作家が書き下ろしたテキストは、イベント的な感覚で読まれることが多かった。誰が読んでいる、以外の話題のタネや

確認のためにあるものである。ネットワーク上の会話における価値を生んで、好きな人が存在するという

しかし、純文学にとってはそれは嘆くべき事態でもないことだ。彼は本来重要視しないタイプの人間である。

として存在するものとして認識しているくらいだ。とはいえ、現状の分析としては、ケナの

かった。

「読書界が将来的に消滅すると考えてしまう人もいる。文字から物語を読み取るような人が減少していくかもしれないね」

評論家の言うとおり、ケナはうなずき、ケナは首をかしげた。

と、そこに編集者から声がかかった。

「なかなか面白い話をしているところ申し訳ないが、そろそろ次の撮影に、今回の取材はというとなので、ケナ・ドロ

ンズと私で組んでもらう」

そう言ったのは、絢子である。

ケナが可児先生の力で制御できることがわかってから、紗絢としては課題がやってきても緊張すること

はなくなった。可児先生の力で暴走させることがないからだ。

「今日の授業の課題です。動物を使って、生物に影響を与えます」

先生がそう言った。実験室に移しての授業である。二人ずつに組になった生徒たちの前、カエルの入ったケースと、数種類の薬物のビ

ンが置いてある。

「生物の薬物を作って、それを魔法で変化させて、それをカエルに与える。そして効果が出るかどうかを見るのです。一番

のはカエルの数が足りないからですので、一人ずつ順番に行ってください。生物は、カエルの体の色を変えるま

のです。イメージ通りの色を作れるかどうかにチャレンジしてみてください」

先生が説明を加える。

が、紗絢は怯えて、体を硬くしていた。傍目にもわかるほどに緊張している。

「どうしたの？」

可児先生が心配して紗絢に声をかける。今日の授業は可児先生の力で暴走する心配はないはずなのだ。

「い、いや……大丈夫。うん、なんでもない。それより、失敗するんじゃないぞ」

紗絢は震える声で告げる。

実は、納谷が苦手なものはカエルである。内田先生も実演の度にそのことを聞いているが、すっかり忘れてしまっているのである。

「色をイメージして、そのパターンを脳内に記憶する。これなら、実際に見せずに済むんじゃないかな」

内田先生が言った。

「大丈夫、アタシが失敗しないようにやってやりますね！」

ケナが自信ありげに言う。

「いいや、頼むぞ。ホントに頼むぞ」

納谷はガクガクとうなずいた。

「とはいえ、やっぱり信用できないから、服部さんに先にやってもらわないと」

納谷は心ここにあらず、という態度で聞いていたが、しばらくしてようやく内田先生が言っていることの意味に気づいたらしい。

内田先生が言う。

「そ、そうだな。うん、簡単な術から見ていろ」

服部は手を取り、納谷に術をかけた。イメージを脳内に記憶するのはマナの動きを利用されたプログラムで行われるが、イメージそれ自体が鮮明でなくては、後で色を重ねかけたものになる。練習と経験のコツが必要なのだ。

術をかけ終わった納谷、その結果を内田先生に渡そうとした。

「さ、さぁ、できたぞ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。僕が触れてイメージを補完してしまったらいけないだろ？」
完全に異物の混入だ。ビンに触れないように下がる。
「いや、そこはイメージをしなければいいのだ」
「そう都合良くはできないよ。それに、頼み込んだから、今日中にやらないと」
女子高生が、まったく気の回らない阿呆である。そこまで言われれば絢納がカエルに触れたくないとわかり
そうなものだが、阿呆には「察してくれ」というのは通用しない。おまけに絢納は頑固なものだから、カ
エルに少しでも近づきたくないなどとは口が裂けても言いたくないのだ。
「そうだな、わ、わかってはいるのだ、わかっては」
絢納が行動を止めた。
「どうしたね？　早くお願いするよ」
ケナが急かした。彼女も鈍いと言うより無頓着なので、まったく事情に気付いていない。周囲の生徒たちがカ
エルの体色を変えるのに成功しているのを見て、早く目の前でやってほしくてたまらないのだ。
「うん、わかっている、わかっている。さぁ、やるぞ、やるぞ」
絢納がケースの蓋に手を掛けた。
「蓋をあけるぞ」
「いちいち実況しなくていいね」
ケナがもっともなツッコミを入れるが、絢納はそれを聞く余裕はない。

「蓋を開けたら、容器のカエルに垂らして、それを体内に浸透させる」
震える手で容器の上から、垂らす。
しかし、その手はカエルからはるか上空にある。ケースからも十センチは上の位置だ。
カエルの大きさは一センチもない。当然ながら命中するはずもない。
既に、こうなるといいかげん絢乃もカエルが苦手という事実に気付いても良さそうなものだが……。
「簡単な解決策だから、わざと難しくしているのか」
などと勝手に納得している。
もっとも、ケナはそうはいかなかった。
「ばしゃっとやればいいね！　えいさ！」
ケナは素早く絢乃の腕をつかむと、ぐいっとカエルに近づけた。
がたりとケースが揺れて、そのショックでカエルが突然ぴょこりと跳ねる。そして、絢乃のビンを握ったままの絢乃の指に、きゅっ、としがみついた。
「ぴぃいいやぁああああ！」
絢乃は跳び上がった。容器のビンをケースの中に落とし、激しく手を振るが、カエルは指にしがみついたまま離れない。
「い、い、い、いやぁあああああ！」
絢乃は手を上にあげ、ぶんぶんと振り回す。

「あ、そうか……綿抜さん、カエルが苦手……」
今更のように気づく天丸である。さすがにそう気づいてからの行動は早い。ひょいと綿抜の腕をつかんで、カエルを取ろうとする。が、綿抜は腕をつかまれても暴れ続けた。
と、それまで粘って指にしがみついていたカエルが、指が激しい運動をやめたことで安心して逃亡をしたのか、ぴょこたんと跳ねた。空中へ。
空中へ跳んだものは当然落ちてくる。
カエルは綿抜の胸元に落ちてきて、ぬるりとシャツの下へ滑り込んだ。
「ひゃ、ひゃ、ひゃあああ！　ぬめるぅううう！」
綿抜が身体を激しくくねらせる。天丸は綿抜を押さえつけた。
「落ち着いて。別に害があるカエルじゃあない」
「そ、そんな理由じゃ……。ひゃ！　は、入ってくるぅぅう！」
綿抜は天丸の腕の中で顔を真っ赤にしてもだえる。
「ちょ、ちょっと。暴れないで」
天丸は綿抜の身体を強く抱き留めることはできない。カエルを外から潰してしまうかもしれないからだ。まさぐってカエルの居場所を確かめることもさすがにできない。
「カエルはどこにいるの？」
「せ、背中……背中！」

じたばたする絹の身体を曲げさせ、阿九凡は胸部を確かめる。シャツの中にうっすらと緑色の影がある。
「手に入れるわけには……。そうか、この間の授業の錬金術を使えば」
阿九凡はケナに耳打ちした。
ケナは阿九凡の意図を了解したかのようにうなずいた。
「まかせて！　この間の授業の錬金術！」
ケナは阿九凡のマナを制御して、粉のごときサイズの水分を積み上げるような錬金術を成立させている。あれと同じ事ができるなら、服の中からカエルを外に出すくらい簡単なことだろう。
ケナは阿九凡の手に触れた。
「マナを操るよ……！」
その言葉とともにケナは阿九凡と錬金術を行わせた。
しかし、二人がかりの作業である。二人の意図が違っていたら意味はない。この場でケナがすっかり意図を理解していた。そして、阿九凡はそれを制止することはできなかった。
「これで問題ないね！」
ケナの声とともに、一瞬で絹の着ていた服が宙に舞い飛んだ。
一言でいえば、あまりに早業な脱衣であった。服を破ることなく、ボタンを外し、ホックを外し、ジッパーを下ろす。さらには下着のゴムを伸ばし、抵抗なく下へ落とす。
「きゃ、きゃあああ！」

琴絹が、先程までとは段違いな絶叫を響かせる。
華奢な裸体がさらされ、クラスメイトたちの間にどよめきがわき起こる。
「なんでこんな何もない授業……」
「これぞ魔王！　無慈悲なひんむきとは！」
男子たちの好奇の目に、阿光は慌てて自分の着衣を脱ぐ。
「うわ、ちょ、ちょっと……」
が、阿光は着衣を琴絹にかけてあげようとして、テーブルの上に置かれていた実験用の薬物のビンをひっかけてしま
う。



「あっ……！」
ビンはガタリと音を立てて転がり、しゃがみ込んでしまった絢の頭に中身をぶちまけてしまう。
「しまった……」
「ひっ！」
冷たさに声を上げる絢。
しかし、真の衝撃はこの後に襲ってきた。
すでに牛乳で白く変色させていた白い絢の肌は、みるみる金色に染まっていく。
「こ、これは金粉ショー！」
生徒たちがどよめく。男子だけではなく、女子までも。
「露出プレイにしてもあり得ない！」
「最低。通り越して、なんかすごいかも……」
「新時代の大人エロス？」
金粉ショーのような見た目になった絢に、どよめきが降り注ぐ。
「な、なんという屈辱……」
絢の腕に体操服を巻き付けて、水で洗い流し
ようやく牛乳と絢を落ち着かせることに成功したが、それは絢の怒りの念をわかせる結果しか生み出さなかった。
「ばっ、ばっ、ばっ、馬鹿者っ！」

綿貫の全力パンチを顔面に叩き込んだ。

○

「しかし、私まで罰を受けることになるとは……。あり得ない」

綿貫がぼやく。

「ごめん。生徒会長は僕が頑張るから」

何気に殊勝な態度を見せる。

「だけど、カエルを出すのに、服を脱ぐのが一番！」

ははは、と笑うケナ。

天文部が向かっているのは、図書館である。生徒会長を辱めて混乱させた罰として、そこの清掃と図書の整理を命じられたのである。

図書館には紙の本が所蔵されている。データ化される以前の本が蒐集され、ここでデータ化が行われたのである。そのまま紙の本は放棄されることなく、図書館の地下にそのまま保存されている。その数、図書のみで三百万点。

「図書館の紙の本は、結局のところ最も辺境のものなんだろう？　それを整理すると聞いたが」

さっさと話を変えようと綿貫が聞くと、ケナは調べた資料を覚えたままに口にする。

「まだ本を手に持っていたいという趣味人が大勢います。その人たちが持ち込んだ本が多数ですが、寄贈されます。これらは本来売れるものとされないものがありますね。著作権者の許可が出していない場合がほとんどだからです。

そのため、近年の紙の図書は電子化処理が行われないまま、分類されずに永久保存されますよ」
「それで、情報整理が必要になるわけか」
「そうです。まさに今、アタシたちは有言実行中なのです」
ケナは嬉しそうだ。紙の本に触れられるのが楽しみでたまらないのだろう。
「本が好きな人は、最終的に紙の本にこだわるようになるって聞くけど」
思わずつぶやくと、ケナは嬉しそうにうなずく。
「そうですね！　アタシは本物に触ってはいませんが、それでもわくわくする感じがします！
本物の本物って感じがするからですね！」
「本物の本物、ね。電子書籍の実物の本にこだわっているのは、江藤先輩くらいだけど。確かにデータよりは、実際に触れ
るものの方が本物の感じがするな。僕らが読んでいるのはどちらにせよ文字だから、同じ情報を認識できている
んだけどね」
――僕が認識している情報は、決して本物の実体にはならない……。だけど、今保存されている情報は、電子書籍化されたら本の中身の実体関係な
るんだろうか？
昔、父はふとそんなことを考える。あの戦争の際、望一郎から聞かされたことだ。"記憶さえいれば、情報は実体な
るという。
――僕は、実はどんな世界に住んでいるんだろう？　きっと、内側からはわからないんだろうけれ
ど。

そして、その個性は「ケナ」のことを指しているらしい。確信はケナの中に唐突に目覚める何かの本能か、そのようなもののことだが。

「蓄積されたデータに、僕が持っていない、というのは、なんなんだろうね？　オリジナリティだけが僕の拠り所なんだろうか？」

純也は独り言として言ったが、それに綾奈が首をひねった。

「君の言っていることは、ときどきわからん。いや、しょっちゅうか」

が、ケナはその言葉に敏感に反応した。

「そう、オリジナリティ！　アタシはそれが欲しいです。記憶がなくても、きっと本来の人格なら、アタシはアタシになれますね！」

無邪気に笑うケナだが、それを聞いた純也は、どういうわけか、寂しさに似た感情に襲われた。

○

同じ頃、不二子はころねに呼び出されていた。

「へえ、めずらしい組み合わせですわね」

不二子は生徒たちの来ない校舎裏に潜り込んでいた。ころねが人払いを願ったからだ。

「そうですね。価値情報があなたにかかわると、それなりに大変な情報がごろごろ出てきそうですので、本

で余計な仕事を増やしたくないとの判断をしていました」

ころねが、淡々と、怖ろしいことを言う。

不存もちろんあまりいい顔はしない。

「あなたは結局の所の立場ですものね。しかし、そんな挑発をするために作ったのではないでしょ

う？　既定のイレギュラーな事例の監視を外すなんて、よっぽどのことですものね」

「はい。情報交換をお願いします」

「ケナ・ドロンズのことね？」

私が言うと、ころねもうなずく。

「そうです。あのデートのとき、ふざけてはいましたが、それなりにあなたは情報を収集してい

はずです」

「もちろん。でも私はほとんどわかったことはなくってよ」

「こちらもそうです。そこで、我々の調査では足りないと判断し、唯一の方法を試してみようかと思います」

「つまり、あなたが欲しているのは、黒魔術師の情報、つまり自国の規定の情報ではない、人間同士の会話のログということです

わね」

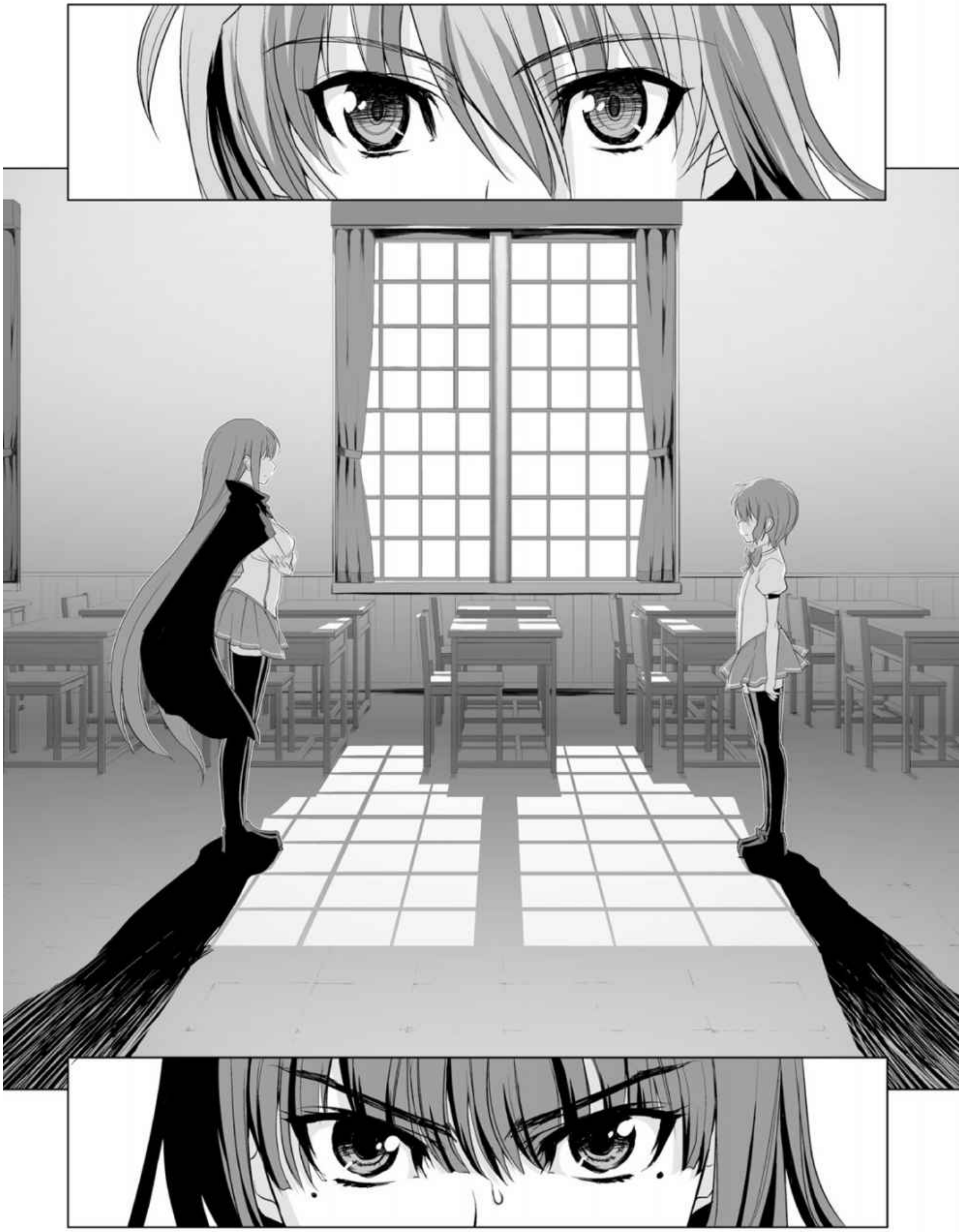
「はい。こちらは、それを使っての情報収集を始めます」

「あなたは、この帝国（ていこく）の国家的な重要人物と、戦後の情報のズレを確認したい、とこうおっしゃってるのね？
かなり無茶（むちゃ）なこととは思いますけど」
天子はにやりとした。
「その通りです。ご理解が早くて助かります」
ころねはそう言った。
あの戦争の戦後処理について、都合の悪い情報が人々の間から消えている。何者かが恣意的（しいてき）な記憶の削除（さくじょ）を行ったということだ。
そのことと、ケナ・ドロンズの出現に関係があるとしたら……。
「情報提供者であると嬉しいんですけど」
天子はにやりとする。
「そうくると思いました。これをどうぞ」
ころねは大量の銭貨の入った袋（ふくろ）を差しだした。
「いりませんわよ、こんなの！」
天子は銭貨の入った袋を手で払おうとするが、ころねはその手をするりと避（さ）ける。
「まあ、そうくるのもわかっていました。こちらが古代の生物の再生細胞（さいぼう）を培養（ばいよう）したこと、その罪を不問にいたします」
ころねが言うと、天子は目を丸くした。

「なるほどね。その情報を持って閲覧できる関係者は、あなただけがそれを知っているんですものね。編集者についてのログが改竄（かいざん）された今は」

そして、少し考えた後、うなずく。

「わかりましたわ。いいでしょう。データへのアクセス権限のパーミッションであなたに解放いたしますわ」



午後十時、魔法陣の展開。そこに映ったマーナスクリーンにアドレスとパスワードを表示する。魔術師は、未だに完全な魔術の

を手に入れてはいない。彼はその神メモリの中に様々な知識を持っており、そこにライフログを保存してい

る。魔術師たちは、その暗号の解析を行い、そのパスワードを交換しあっている

ころねの予見

「情報が揃いました。これまで行ってきた練習の成果をご覧いただきます。これにより、残り七十パーセントから九十パーセ

ントに向上します」

その言葉から数秒後、ころねは目の光を止め、わかりました、とうなずいた。

「どうでしたの？」

「今までは不完全でしたが、これでほぼ確実になりました。ケナ・ドロンズは、計算よりデータの歪みから

み出された人間です」

○

「すごいですね！」

ケナは目を輝かせて答えた。

広大な敷地を埋め尽くした書架は、人間よりも遥かに高く、昔のSFにおける未来都市の高層ビルが並んだビルのようにそび

えている。

「残念ながら、購入はあちらだけどな」

紳士は入り口の右にあるカウンターを指した。そこには本が雑然と積まれている。価格表などはあるだろう。脇(わき)はキャスター付きの台車が置かれていて、そこにも雑然と本が積まれてこぼれている。適当に運んできては放置しているわけだ。

「本が可哀想(かわいそう)ね」

ケナは台車に歩み寄って、こぼれた本をカウンターに積んだ。

「僕はその気持ちはわかりにくいけど、物を大切にしないのはよくないことだな」

唄もケナを手伝う。

しかし、ケナは唄の言葉がお気(き)に召(め)さなかったらしい。

「本が可哀想って、わかりませんか？」

「いや、本だけが特別なものじゃないってことさ。道具は大切にするものだよ。もちろん」

「そうじゃないですね！　本というのは特別なもので……」

ケナは腕を振り回して無言で抗議(こうぎ)したが、その後の言葉がうまく続かなかった。

「大切な物をそう思う気持ちはわかるよ。ごめんね。単に僕の言葉が足りないだけだ。〈書物〉の耽溺(たんでき)と、パッケージとしての〈書物〉の概念が、どうも似ている気がして、共存するのかもしれない。システムにすぎない神への信仰(しんこう)と、って信じてしまうことと似ているのかな」

屁理屈を言うと、ケナは頬(ほお)をふくらませた。

「難しいことを言わないでくださいね！　いいです、そうやって本を嫌っているといいです！

「思ったよ。好きになるようには努力してみるさ」

阿比は本を一冊手に取った。

体の凝った装丁の美術本は取れない。無作為にひょいと手に取ったものも、赤く染められた革カバーの豪華な作だ。

ぱらぱらぱらとめくってみる。紙の音がさらさらと響く。

——これはこれで持っていいものだな。ドロンズさんがこの感触を最初から知っていて本を好きになったのではないと思うけれど。

阿比はそんなことを考えていると、後ろから頭をこつんと叩かれた。

「無理。本を読まないな、基本」

綿貫は本に背を向けて構えていた。

「そりゃそうだ。授業が進まない」

阿比は笑顔を浮かべる。そして、ケナを見たが、彼女はすでに大きめの一冊を膝に乗せて夢中になって読んでいる。

「そのままにしておこう」

阿比は綿貫に笑いかけた。綿貫はわざと大げさに肩をすくめてから笑い返した。

「君もたくさん働くんだぞ」

「わかってるさ」

阿見光はカウンターを回り込んで、スキャナーの確認をした。本を透過して内容をスキャンすることができると

スクリーンに映し出されたマニュアルにある。

『一冊ずつスキャナーに通せばデータはとれるわけか』

「データ化したものは自動翻訳表示されるから。それごとに編集部へ移していく。作業手順化できた。自動的に編集部へ移す作業」

紗絢は阿見光にほほえみかけた。

「そうしよう」

阿見光はカウンターの外に出て、紗絢の場所へと移った。

○

「図書館よりデータの存在から生み出された人間」

「そうです。信じられませんが、図書館はそのようなことを行える能力を持っています」

本とこころねは図書館自身が持っている。

「それじゃあ、図書館は新しい世界を生み出すことができるということですの？」

「そういうことでしょう。ただし、この世界を変化させてしまうような力はないようですが」

「わたくしたちは非常に不安定な場所に立っている、ということですのね」

「そこまで悲観的になることはありません。人間は自我があり、自由意志があります。この世界においては人間が命令を出さない限り、誰かの存在を消してしまうことはできません」

「それでしたら、人間よりデータの存在から生み出された人間が存在していることにどんな意味が？　彼女がこの世に存在していると、どんな不都合があるんですの？」

「おそらく存在を修正するために人間として生み出されたものと思われます。存在していること自体は不都合はないでしょう」

「それなら、どうして緊急とおっしゃったんですの？」

「存在を根本的に修正するためのデータ改変が行われる可能性があります」

「そのデータ改変がどのように行われると……」

「緊急事態、そうあったかもしれない〝物語〟を完遂しようとするでしょう」

ころねの表情、一瞬ぽかん、とする。

「なんですの？　どういう……意味……」

「物語を続けるため、行方を隠すために世界が改変された。そのために生じた存在は人間の形をとっている。つまり、彼女が消滅することによって存在が消えるのです」

「ケーナ・ドローンズが消滅する？」

「観測している暇はないようです」

ころねが遠くを見るような目をした。

「どうしましたの？」

「マナの移動を感知しました。まもなく目的の存在と接触します。存在の修正に入るようです。先に行きます」

ころねは空間に転移図形を描き出した。そして二人、その円に飛び込んでしまう。

「ちょ、ちょっとお待ちに……」

早季子は手を伸ばしたが、ころねはさっさとその中に消える。

「後から追いついてください。見届けることしかできないと思いますが」

「そ、そんな無責任……」

早季子は文句を言ったが、すでに転移図形から廊下の空間の中に消えていった。

○

「あーちゃんがんばってる？」

けーながふよふよと飛びながら閲覧室に入ってきた。見ているだけでひどく眠くなってくるような

のんきな顔をしている。

「それなりに、ね」

阿純は高いハシゴの上に立ち、本をいくつも抱えて書架の空いている棚に本を並べていく。

「仕事が少なくて、大丈夫」

けなの申し出に阿見比丘は首を振る。

「問題ないよ。それよりドロンズさんのことを見ていてよ。ずっと本を読んでいるから大丈夫だと思うけれど、僕は彼女を見ていられないから」

「わかったよ」

けなはケナのところに飛んでいく。

そして、阿見比丘はまた別の書類整理に移った。しばらく集中して作業をしていたのだが、けなの声を聞いて振り返った。

けなは奇妙なことを言ったのだ。

「ねぇ？　好きなお話決まった？」

けなはケナにささやきかけていた。

そのささやきが聞こえる距離に阿見比丘はいなかったが、確かに聞こえた。

ケナは積み上げた本の上に座り、膝の上に絵本を開いていた。けなはそんな彼女の肩に手を置いていた。

「け……」

阿見比丘は呼びかけようとした。

その瞬間、ケナの唇が動いて何かを言った。

すると、ケナの身体がまばゆく輝き、阿見比丘の視界を埋め尽くした。

「え……？」

阿見比丘は白い世界の中に沈む。そのとき、絹鳴ころねの懐かしい声を聞いたように思った。

「ちょ、ちょっと……これは何？」
「なんとか間に合いました。いいえ、巻き込まれたというべきかも……」
その次の瞬間には、純也の意識は一旦途切れていた。

○

目が覚めると、豪奢なフロックコートを身にまとっていた。
「ん？」
女子でも着せられたのか、と純也は思ったが、おそらくそんなことではないだろう。
純也は寝室にいる。ロココ調の電飾、天蓋付きの大きなベッド。足元は毛足の長い絨毯に沈んでいる。
「どういうことだ？」
周囲に注意を向ける。部屋は大きいが、立っているのは純也。
しかしベッドには寝ている者がある。ケナだった。
「本を読んでいたはずだけど……起きてもらうか」
ベッドに一歩近寄り、純也はぎょっとして足を止めた。
ケナはどうも何も着ていないらしい。彼女の身体にかけているのは薄いシーツだけ。体のラインが嫌でも目に入ってくる。

「幻覚……ということ？」

つぶやくと、ノックの音がして、扉が開いた。

「失礼します」って入ってきていきなり言うのもあれですが、これは幻覚ではありません」

ころねが入ってきた。メイド姿である。

「ころね……。なんでそんな格好を？　それに、事情を知っているみたいだけれど？」

次元の狭間と、ころねはうなずく。

「一から説明します……」

ころねは、ケナが自らの手によって世界の存在から産み出された人間であること。そして、彼女がその存在を確立するための存在であることを語った。

「存在を確立するために、ここに僕を？」

「ここは、閉鎖空間と化した世界です。内部のものは、普段からあなたが使っているそれですが、今は、少し特殊なものになっていますね」

「どう特殊なんだい？」

「ここから出られないように閉じこめられています。そして、周囲の空間デザインは、ケナ・ドローンデが読んでいた本の内容に沿ったものになっています」

「彼女が読んでいた本？」

改めて周囲を見回した。ヨーロッパの貴族の屋敷といった風情である。

「近世初期におけるヨーロッパの貴族の恋愛遍歴を描いた作品です。娯楽作品として書かれましたが、後世の評価が高まり、文学作品としての名作となったものです」

「なるほど。いわば物語の中に閉じこめられたわけだ」

「はい。そのこととケーナ・ドローンズとの間には密接な関係があります」

「どういうこと？」

「彼女は物語の中の存在そのものです。彼女が消えてしまうことで、物語世界は安定します。そして、物語の世界から彼女は解放されます」

「ちょ、ちょっと……それって、彼女が……ドローンズさんが死ぬってこと？」

純一は、寝ているケーナの顔を見た。今の彼女は、とても幸せそうな顔をして寝ている。そんなに満足しきった寝顔は見たことがなかった。

「比喩的にはそうです。存在が消えるだけですが」

ころねは淡々と言う。

「殺す、なんて有り得ないよね？」

純一は心配になって聞いた。

「殺す、とは言いませんが、消す、とは言います。ただし、彼女はいずれ自分から消えるでしょう。それがであり、そのために生み出されたのです」

ころねはうなずいた。

――消えるために？

阿知　戸惑う。　ということは　ケナは自分を助けるためだけに生み出され　自分を助けるために消えるのだ。

「そりゃあ　ちょっと……」

「お気になさらず　存在が自分から消えるのですから　相手の依存　彼女　受け取ることになっています」

「意味ちょっと　とわからないけど……？」

阿知　問と　ころねは少し間を置いてから言う

「存在は大人の記憶もあります　大人の記憶　つまり彼女が消えれば　彼女も消えるのです」

――彼女の大人の記憶　そして　彼女が消える……。

あのとき一郎語たこの世界の真相　阿知はわずかに見たような気がした　この世界の法則を確立ると尺が合わないことがあること　そして　おそらくは真実の世界の人間が存在する　それがこの世界の崩壊と密接に関係しているらしいこと。

「阿知　この世界の仕組み調ている……？」

「さすがに鋭いですね　しかし　それはこの世界の真実ではない　ということを即座に理解ません。はここにいて　生きている」

「しかし　彼女は間違って……」

阿知　ケナの顔をもう一度見

「そうです　しかし　こうも言えるのです　この世界は　人間の記憶で支えられている　いや　結論

のは正しい話ですね　少なくとも　あなたが記憶の中だけで存在する何かであるということを我の世界の人間は誰

きない。それなら、不確実であると考えるのが、非論理的なことです」
ころねは問題であるため、怖ろしい予説があっても然と唱えることができる。しかし、阿丸は違(ちが)った。いを震わせる。
「怖(こわ)いな。しかし、僕は生きて生まれてきている。それを集約しろってことか」
「はい。ケナ・ドロンズが違うのは、いきなり生まれてきたことです。そこをお忘れなきよう。のことは、膨大(ぼうだい)な演算によって結論付けられました。かなりの不確定要素ということです」
阿丸は、それを聞いて、ふうと息を吐(は)いてから問う。
「それで、彼女は満足するって？」
「はい。そこだけは因果の情緒問題になるでしょう。しかし、情緒パターンにより予測できます。情緒から論理が導かれれば、論理は結論の他になりません。結論を完成させなければなりません。彼女のお気に入りの予測法」
ころねは言った。
——つまり……。
「なるほど。僕は、論理的に振る舞えばいいわけだ。お芝居(しばい)は苦手だけれど、なんとかやってみればいいわけか」
阿丸はそう理解した。
ころねもうなずく。

「その通りです。しかし、ケナ・ドロンズの活躍こそが重要なので、それほど厳格に演じる必要はないでしょう。とはいえ、結末に存在しないものは、この世界観には存在しないものと予測できます」

「簡単なルールだね」

「問題はそれほどないでしょう。この小説の内容は死の出ない穏やかなものです。楽しんで演じることができるものと思います」

「そりゃよかった」

何だか少し気が楽になる。

しかし、次のころねの言葉で、すぐに青ざめることになるのだが。

「楽しいですよ。ヨーロッパの貴族の恋愛物語ですから。様々な女性と浮名を流し、最後にこの伯爵令嬢と結ばれるのです」

ころねがケナを指さした。

「え……？　僕、ヨーロッパの貴族？」

○

《ああ、もう！　遅れてしまいましたわ！》

何かの頭上から声がした。

「え？　何？　何」
周囲を見回すが、誰もいない。声が空中からのものだということだけは理解できた。
「先輩（せんぱい）？　どこに？」
ころねが言った。
「ああ、小説は冒頭の説明という地の文があります。遅れてきた主人公はその役割を負わされたと言うことです」
《ちょっと、どうして本から声がしているんですの？》
「その本をご覧下さい。主人公はその中にいます。あなたは記述を確かめ、私とストーリーの最後まで導く役を務めていただく
ことになります」
ころねが言う。その後も説明は続いた。簡単にころねから聞いていた事柄、その内容をすぐに理解する。
《あっ！　もうちょっと早ければ、わたくしが主人公に選ばれましたのにっ！》
「あなたが中に入れたとしても、せいぜいがヒロインの恋路を妨げます。あきらめて脇役に徹（てっ）してください」
ころねは冷淡（れいたん）だ。
《あんたは所詮（しょせん）メイドじゃない！》
「おや、読者様はメイドにも差をつけるのですよ。ふふふふふ」
ふふふ、という笑いが激していて、妙（みょう）な威圧（いあつ）感がある。
阿見もさすがに困り果てた。

「ちょ、ちょっと、やめようよ……」
「やめても戻る方法はありません。物語が完結すればいいのです」
《あーっ！　あんただけ勝手に面白いことしようたって許しませんわよ！》
「許すも許さないもないです。何しろ、大公女様役で登場する時の女の子を見つけますから」
「ちょ、ちょっと！　冗談だよね？」
阿知見は慌てるが、ころねはそれには答えなかった。
「さあ、オープニングです。侯爵家令嬢、ケナ・ドロンズと出逢う！」
びしっ、と何もない空間をころねは指差した。

第一幕

「始まったって……もう始まっているし」
阿知見は寝ぼけているが、ころねはこのシーンにはいないというので、出て行ってしまっている。そもそも
なぜここにいるのかわからない。
《伯爵家のパーティで、朝方まで飲んだ大公女様と間違えたんですの！》
いらいらとした不平の声が降ってくる。
「なるほど……じゃあ、ふらふらとしてればいいのか。えーと、よっぱらったなー」

《ちょっと大胆すぎじゃありませんこと？》

「知らないよ！　昨晩じゃあるまいし……」

阿久比がぼやくと、さっきまで辛そうに寝ていたはずのケナが、ばっ、と飛び起きた。

「誰？　アタシの寝室に……！　きゃ！　痴漢！　出て行って！　人を呼びますよ！」

ケナは毎晩台本を読んでいるため、完璧な演技である。いや、演技をしているという意識すらないのかもしれない。

その、迫真の演技に阿久比も思わず素で答えてしまう。

「失礼。脅すつもりはなかったんだ。その……あまりに素敵な寝顔に見惚れてしまっていただけなんだ」

《阿久比様、それ、素ですよね？　どうして、一字一句同じ台詞なんですの？》

「……それ、本当ですか？」

さすがに阿久比も自己嫌悪に陥る。とはいえ、落ち込んでいる暇なく話は進む。

「その軽薄な言葉……！　ろくな男じゃないわね！」

ケナは、はだけた胸を慌てて隠し、きつい声をあげる。

「軽薄な男かもしれないけれど、さっきの言葉は嘘じゃない。それじゃあ。失礼、まだ夜は明けきっていない。もう一度おやすみ」

阿久比は急いで部屋を出た。

そして、どことも知れぬ上を見て、酔ったように問う。

「兄上、これで良かったの？」

《……兄上らしくないですわよ。弱音を吐いてらっしゃる？》

「い、いや、そんなことは……」

廊下でまごまごしていると、後ろから声がかかった。

「お、お、お、おにいさま……」

ひどく緊張した声である。

驚いて振り返った兄上は、自分の目を疑った。妹がドレス姿で立っていたのである。

「お兄様」

普段と違う服に兄上は驚く。さらに目のやり場に困る。ドレスの胸部が大きく開いていて、コルセットが下から胸を押し上げているのだ。

「ば、馬鹿な、その目はなんだ！」

綺麗な兄上は殴りかかろうとする。と、それを手で止めた。

《ストップ！ 兄上、兄妹なんですのよ！ ちゃんとそう言っておいたでしょう？》

「し、しかし……兄上。この服、着慣れないのはまだしも、なんと破廉恥な……」

《知りませんわよ！ なんなら代わってあげてもよろしくてよ！ わたくしならそのドレスをバッチリ着こなして見せますわ！》

千子が怒鳴（どな）る。

「まぁ、まぁ。兄上、ここは抑えて……。先に進みましょう」

九郎丸はおずおずと言うと、さらに大きな声で千子が打ち切る。

《恋人（こいびと）のように、肩を抱きながら退場》

「こ、恋人のように……？　兄妹でしょう？」

《知りませんわよ！　どうもそういう兄妹らしいですわよ！》

「な、なんたる衝撃展開のストーリーか……」

絹子は顔を赤らめ、身体をがたがたと震わせたが、兄の九郎丸は肩に身体をもたれさせる。

「ちょ、ちょっと、兄上さん……」

「絹だ。妹のだぞ」

「い、いや、だから、じゅ……絹……」

しどろもどろになる九郎丸だが、さらに絹子は九郎丸に身体を押しつける。

「あ、歩くぞ。ストーリーだから仕方なくやっているのだ。仕方なく……」

言い訳しながらも、絹の顔は満更でもない色が浮かぶ。

《あーっ！　なんか言い訳しつつ、役得をゲットする方法を考えつきましたわね！》

「[illegible]やかましいな、か、肩に手を回してくれ……お兄様」

「なっ、殴ったり……はしないよね？」

阿比丘は絹川の肩に手を置いた。手を置いてから気づいたのだが、ドレスには布が無く、触れるのは素肌（すはだ）である。

「あ……ご、ごめん」

「ば、馬鹿（ばか）！　謝（あやま）る奴（やつ）があるか……」

絹川はそう言いながらも、阿比丘の手の甲に手を添（そ）えた。

《わ、わたくしも中……！》

「が、[illegible]黙（だま）っていろ……」

絹川は阿比丘を促（うなが）して歩きはじめた。

と、寝室のドアが開き、ケナの顔が覗（のぞ）く。

「あ、あの……人、恋人がいらっしゃるのね。いいえ、アタシには関係ないこと」

ケナは[illegible]揺れる心を演じきる。

《ほら！　このシーン、終わりましたわよ！　離れた離れた！》

不意に、自棄（やけ）になったような声が響いた。

第五幕

《偶然（ぐうぜん）の再会を果たす二人、えと、ケナの父である伯爵（はくしゃく）の悪事を見てしまった間抜けな男は、手下に追われて逃亡（とうぼう）。その[illegible]

ケナのスカート……スカートの中に隠れるぅ？》

亜子は素(す)っ頓狂(とんきょう)な声をあげた。

「いやいや　それはさすがにまずい……っていうか　どんな命令よ」

阿也は意見。

《いいえ……覇王？　悔(くや)しいけれど　旅団の作品はスカートに隠るシーンがいくつもありますのよ……》

「そ　そうなんだ……」

《だからといって　やればいいってもんじゃ……って　もう始まってますわ！》

亜子が叫(さけ)ぶ。阿也に剣(けん)を持った兵士たちが押(お)し寄(よ)せてくる。

「うわっ！」

阿也は慌てて逃(に)げ出した。

しかし　逃げる先が決まっており　そこに行きたくない　以外の答えひとつも言いたくなる。

「あ　あれを魔術で吹(ふ)き飛(と)ばしちゃ　ダメかなぁ……」

「ダメです　ルール違反(いはん)ですし　そもそもここでは使用魔法は使いません」

通りすがりのメイドであるころねが言った。

「いきなり出てきたね……。　そうか　屋敷内(やしきない)のシーンだと　どこにメイドがいても不自然じゃないからいいのか」

阿也は困惑するが　状況(じょうきょう)が好転したわけではない。　逃げるうちにドレスを着込んでいたケナの部屋に到着(とうちゃく)してしまう。

「うわっと！」

「きゃああ！」

「お静かに。追われているんです。その……最大限に自然な手段でかくまってはいただけませんでしょうか？」

「か、隠れる場所はこの部屋のどこにもありません……。い、いいえ、ひとつだけ！」

今回も変装してまでスカートの中を避けようとした阿兄が、物語を完遂しようとするケナの前に無力だった。

ケナは顔を赤らめ、ペチコートで膨らませたドレスのスカートをまくりあげた。健康的な太ももと下着が露になる。

「うわっ！」

阿兄は顔を逸らすが、ケナはスカートを降ろさず、さらに追っての手段で迫ってくる。

「ちょ、ちょっと……どうすれば……」

完全に動けずにいる阿兄である。

と……。

「どん！」

阿兄の身体をいきなり通りすがりのメイドが突き飛ばした。阿兄の身体が転がってケナのスカートの中へ。

ふぁさ、とスカートが決し、阿兄の身体を完全に覆い隠した。

「お嬢様、賊が来ませんでしたか？」

「あっちへ行きました」

そんな会話の後、追っ手の足音が遠ざかる。

「ふぅ」

暗くて何も見えないが、それでもきつく目を閉じていた純也は、安心して外に出ようとする。が、その胴体を柔らかいものが締め付けた。ケナの太ももであることはすぐにわかった。

ケナの熱気を身体中で感じる。

「ちょ、ちょっと……！」

純也は身をよじった。

「いや！　早く出てください！」

ケナは悲鳴をあげた。

「早く出ろって、出たいのはこっち……」

そう言いかけた純也の頭をスカート越しにこんと拳が叩く。その意味を理解した純也は咳払いをしてから問う。

「ええと。それはその……。大丈夫なんです。まだ追われてはいまいか。あなたが僕を騙してはいまいか」

「まぁ、臆病な上に失礼な人。アタシがスカートをまくった途端に疑うなんて！」

揶揄かって言った後、ケナは太ももの力を緩め、スカートをまくった。

阿見沢も立ち上がる。さすがにケナの顔をまともに見ることができない。が、ケナは阿見沢の頬を両手で挟んで

の方に向けさせる。

「あなたがアタシに挑発なさるのは最後」

ケナは怒りながら言い、その後、いたずらっぽい顔で舌を出した。

――そうか。彼女は完全に入り込んでいるわけじゃなく、お芝居だってことはわかっているんだ。

阿見沢はそう気づいた。

ケナは生き生きとした表情をしている。このごっこ遊びを心底から楽しんでいるのだろう。

「何度も挑発をお詫びします。あなたは勇敢でお美しい」

阿見沢は芝居がかって言い、ケナに向かって目を閉じた。

ケナは幸せそうな笑みを浮かべ、しかし口調だけは怒って言う。

「それはこれからもアタシの裸を見にいらっしゃるってことかしら？ 汗臭く、埃にまみれた

お方？」

ケナと阿見沢は笑い合った。

《あっ！ なんか別の意味でいい雰囲気になってませんこと？》

「私は通りすがりのメイドですが、そのくらい許すのが年長者というものです。さて、これより二幕」

第二幕

《ええと……ほのかな恋心で結構な関係を続ける二人。しかし同時に男は、愛していない女性とは気軽に肉体関係を結……え……ちょっと！　濡れ場だらけじゃありませんこと！》

乃子は慌てる。

「私は通りすがりのメイドですが、花瓶の花を替えるお仕事中に背後から襲われることになっています」

ころねはテーブルに置かれた花瓶に手をそえて、腰を突き出した。

「さぁ！」

「さぁ、じゃなくて……」

阿見光はさすがに今度ばかりは尻込みする。

「しかし、襲われないと話が進みません」

ころねがなまめかしく腰を動かす。

「悪いけど、そういう行動をするのやめてもらえるかな……」

「別にメイドの仕様書に禁止とは書いてありません」

「そりゃ、そうは書いてないだろうけどさ……。そうだ、仕様書、そこの詳細な記述って、どうなってます？」

阿見光に良いアイデアが浮かんだ、という手ごたえを聞いた。

《細評……って、許せるつもりですの？　あ……こうありますわね。獣のように後ろから襲いかかり、激しく性欲を満たした》

「そういうことなら！」

阿久比はころねに後ろから激しい勢いで襲いかかり……。

「ああ、やめて、やめてください」

「ええい、こうだ！　こうだ！」

「ああ、ごむたいな……。お尻……お尻ぶつなんて」

つまらなそうにころねは言った。

阿久比はころねのお尻をはたきでぺしぺしと叩いている。

「それで、激しく性欲を満たせるのですか？」

ころねの質問に阿久比はうなずいた。

「そりゃあ、僕だって男の子。君を勝手に怒したいときもあるからね」

「……ああ、いたい。ご主人様、やめてええ。はじめてなんですう」

《まあ……裏技みたいなものですわねって。ええと……姉妹の行為なんですが……》

「い、姉妹悪戯しますが、どうしたんです？」

《一糸まとわぬ姿の姉妹はベッドに入り、互いの身体をまさぐる。胸の桃色のつぼみを指でいじるとすでに性

しっとりと濡れて、肉の花弁はそれを迎え入れる。絶頂は激しくあえいだ……。って、何を言わせますの！》

「すごい説得力だなぁ……」
「通俗小説を研究して参考にされましたから」
「ちょ、ちょっと待て！　次の私の出番はいきなりこれなのか！」
綸はすでに顔を真っ赤にして、純一への攻撃の構えでいる。
《わ、わたくしなら即座にベッドインですわよ！　おぼこい娘はこれだから！　ほほほ》
観月は、顔を赤らめていた割には、余裕を見せる子である。
「いや、普通に考えよう」
純一は真剣な顔で考えこむ。
「そ、そこまで考えこまなくても……。む、迎え入れるという部分だけごまかせれば、私はかなりのまでは……許せるつもりだぞ。さ、触るくらいなら……」
綸はうつむいて小声で言ったが、純一は聞いていなかった。
「そうだ、これならごまかせるじゃないか……！」
「は、裸で同じベッドに入る……まではしなくちゃいけないんだな」
人払いをした寝室で、綸がベッドに潜り込んで、布団をかぶってから服を脱いだ。白の薄手のネグリジェがベッドの脇にするりと滑り落ちる。
純一は後ろを向いて、綸を待っている。

「そうだよ。そこは仕方ないけど、極力身体は触れないようにするから……。僕を信じてよ」
確認してから、阿比は絹の反対側からベッドに入る。
「ちょ、ちょっと足が触ったぞ……。それにめくったときに見えなかったろうな……」
「だ。大丈夫でも、背中を向いているわけだから、見たところでもう慣れてしまった背中な気もするんだけど……」
「馬鹿っ！　余計なことを言うな！」
絹の怒鳴り声。
「ご、ごめん……」
阿比は謝りつつ、慌てて自分の下の服を脱いだ。
ベッドは広かったが、それでも脱ぐときに右手の指が絹の背中に触れる。その触れ方が絹の背中の真ん中を縦に軽くこするようなものになってしまった。
「ぴゃ！」
絹が声をあげて反り返った。そして、すぐに背中を丸めてぶるぶると身体を震わせる。
「あ、ごめん、くすぐったかった？」
阿比は詫びる気持ちから、無意識の内に絹の方へ手を伸ばしてしまう。彼はその右手で腰のくびれを撫でることに。
「ひゃうううう！」
ぞくぞくっ、と絹が身をよじる。

「ご、ごめん、くすぐったいよね……」
「そ、そうじゃ……ない……。いいから動な……」
絢は息も絶え絶えに訴える。
「いや……ご、ごめん」
純はなにがなんだかわからないといった様子で頭を下げた。
しばらくしてから、震える声で絢が言う。
「じゃ、じゃあ、やるぞ……」
「うん、わかった……」
二人は息をのんだ。
純は絢へ手を伸ばした。
絢がきつく目を閉じ、別の方へ顔を向けた。
そして……。
「うう……情けない……。こんな行為なのに、いや、こんな行為だからこそ女として大切な何かをなくした
がする……」
「ああ、僕はなんだか妙に情けないんだ……」
二人は布団から肩だけを出し、お互いの髪の毛に手を突っ込んでかき回してから、用意しておいた薔薇のつぼみ
と繊細な花をいじくった。

「菜花の花を香るシーンがあって助かった……」
「花びらはしっかり濡らしたか？」
「……一応」
純也は菜花のつぼみを指でつまみ、花弁の間に指を突っ込んだ。
「ああ それでも何かはしたないものを感じる……」
結衣が純也の指の動きを見て嘆く。
「早く済ませてしまおう。あ ほら 僕の指が耳に入るから あえいで。あえいで」
純也は結衣の耳に指を入れる。
「ひゃ……！ うう 嫌だなぁ……。性交されるよりも屈辱的な……うう……うう……」
どちらかといえば屈辱感による嘆きだが それもあえぎ声には違いない。
と そこで寝室の扉が開いた。
「……純也先輩 お姉の結衣と……って 何してるね……！ ぷっ、あははは！ あはははははは！」
乱入してきたケナが笑い出す。
「あ そこは笑う所じゃなくて……」
純也の言葉にケナは笑いをかみ殺す。
「そ そうだったね……。え まさか 純也先輩 そんな趣味……！」
「まっ待ってくれ ケナ！ 誤解……」



「いいえ、アタシの気持ちを知りながら！　この裏切り者をお嬢様に報（しら）せます！」

ケナは走り去った。

「待って……」

純一は扉に向かって手を伸ばし、身を起こす。と、同時にひっぱられてめくれ、ナナの網タイツが外気にさらされる。

「ばっ、馬鹿！　ふ、不用意に……！」

「あっ！　ごめん、つい……」

慌てて起き上がりかけた純一の手が、ナナの網タイツの腰に触れる。

「ぴゃあああ！」

《ああ！　もううらやましいぃぃい！　ああ、純一様がそんなに気安く体に触れるのでしたら、わたくしも妹メイドに……！》

「というか、放っておくと、妹メイドの背中に攻（せ）め続ける純一様が誕生ですね」

奈子が話に割って入り、ころねが間に割り入ってくる。

「さぁ、このタオルを体にかけて、服を着てください。この次のシーンです」

《この後は、純一様が、どの妹を選ぶのか迷うシーンですわ》

「えっと？、妹メイド、純一様の間に二人」

服を着ながら、純一の周囲。

《そうですわ。ただ、メイドには早々に見切りをつけて、彼女と会話するうちに、姉妹は血の繋（つな）がりがないことがわかる。そういう話ですわね》

「それでは、姉妹様方は部屋から出て行ってください。これより第四世界」

ころねはまたも、虚空（こくう）を指さした。

第四世界

「実は、お二人は血の繋がりはないのです。姉妹は、零落（れいらく）した貴族より幼少の時に譲（ゆず）り受けた者だったのです」

ころねは補足の説明をする。

「それで、惹（ひ）かれあったというわけか。それならば、僕は二人のうちのどちらかを選ばなくてはならない！」

[illegible]芝居かって言った。

[illegible]は暗に[illegible]が、それでもこの結論は重く感じられた、というのも……。

「僕は、ここで誰かを選ばなくちゃいけないのかい？」

[illegible]ころねに聞いた。

「どういう意味です？　全員とイイことをしたくなりましたか？　今からシーンをやり直しても構いませんよ？　それとも誰も選びたくないという意味ですか？　それですと話が進みませんよ？」

「そういう意味だよ。話を進めたくないんだ」
阿賀流はそう言った。
ころねは首を横に振った。
「選ばなくてはいけませんよ。ご主人様。それが世界に対する責任というものです」
それが彼女の論理なのは明らかだった。だが、阿賀流は首を横に振った。
「責任というのはわかっている。でも、僕は妹を選んでも、ストーリーは終わるんじゃないのかい？」
「それは、つまり、ストーリーを放棄して、別の終わり方をするということですね？」
「そうだよ。それでも、この世界の謎は解明されるんじゃないのかい？」
その質問に、ころねは首を横に振る。
「それはケナ・ドロンズが選ばれないということになるはずです」
「でも、彼女は選ばれなかったら、消えてしまうんだろう？」
「そうです。歪みですから。それが世界の法則なのです」
冷酷にころねは言った。
「彼女は妹だ。関係ない」
阿賀流はやや不機嫌に言う。と、ころねが間髪入れずに答える。
「選ばれなかったら消えても問題はなかったんですが」
「嫌味を言わないでくれよ。君だって、消えてしまったら嫌だ」

「そう思うなら、スパンキングでなく抱(だ)いてくださっても良かったのに……」
いつもなら男の子を励ましてあげるころねの言葉だったが、今日の肉丸は反応しなかった。
「そうじゃない。彼女は満足せず、この世界を閉じるなら、それでいいんじゃないかって思ったんだよ」
「それが可能だったとしても、それが彼女のためになると思ったら間違いでしょう」
「え……？」
「彼女はこの世界を気に入らずとも、しばらくしたら消えます。その場合、おそらくは何も彼女の望むことは起こらずに終わるのです」
「そんな……」
「結局、あなたに出来ることは、その程度のことです。彼女を愛していると言ってあげる。千度であっても。他の皆(みな)さんも今回ばかりは許してくれるでしょう」
「どうして皆の許しを得ないといけないのさ……。でも、そのくらいしかないんだな。わかったよ。僕(ぼく)は、彼女を選ぶよ。ケナ・ドロンズを」
肉丸はうなずいた。

○

そして、戦いとロマンスのラストシーン。

ケナを塔に幽閉し、さらなる悪事を働く魔術師。しかし阿児は華麗な剣さばきで魔術師を追いつめ、これを倒す。

実は、行った阿児が、ケナにとっての父を殺したことが明らかになる。さらに魔術師は手下に証拠を隠滅し、魔術師は乗っ取る

ため阿児を執拗に追いつめる。

阿児が殺されると見えた間一髪、愛に目覚めたケナがこれを救う。

「阿児、剣をその岩の割れ目に押し込んで！　それで塔は崩れます！」

「しかし、ケナ！　それでは君が！」

「いいの！　アタシはあなたが生きてさえいてくれれば！」

覚悟を決めるケナ。

岩に剣を押し込む阿児。

轟音とともに崩れる塔に巻き込まれるケナ。

だが阿児は崩れる岩をものともせずにこれを駆け上がり、ケナを抱いて宙に飛ぶ。

「阿児！」

「ケナ！」

ケナの幸福そうな顔が朝日に輝いた。塔が立っていたがけの上には二人きり。見つめ合う二人を邪魔する者は誰もいない。

「あ……あはは！　あはは……！　ねえ、楽しかった、とても」

ケナは笑う。

「僕だ。こういう陳腐なお話は僕も好きじゃなかった。でも少しは考えを改めよう」

死神は、肩で息をしながら言った。

「アタシは…… アナタだけを見ていた」

剣を突きつけて、ケナは言った。

——そうだよな。物語は終わりが来る。

ケナの結末は、誰のものなのか。本人からのものなのか。死神にはわからない。

「僕、このお話の中では…… そういう言い方をする人もいるかもしれないけど……」

そう言いかけた死神の口に、ケナは指を当てて口を塞ぐ。

「アナタの結末は、死神が知っているね」

「ああ…… どうもそうらしい。僕は……」

死神はまた何か言いかけたが、ケナは首を横に振った。

「いいの。アタシは、アナタだけのために生まれて、アナタの手の中で消える。それが運命、そうでしょ？」

「運命なんて……」

「いいえ、知ってるね。アタシだけがこの物語の中の一人、アナタたちとは最初から違っていたよ。アナタはすごく短い間だったけど、アタシに望むもの全部を与えてくれたよ」

「そんな、僕は何もしていない！ 君がいた時間って、すごく短かった！ お互いを知り合う暇なんてなかったくらいで……」

「いいえ、全部もらったんだよ。お話の完遂。それで全部」
「だけど、どうして君だけが消えなくちゃいけない？」
「物語の人間は物語の中で生きて居ちゃいけないね。だけどアタシは物語の中で生きることを許された。そこが違う。るんじゃないよ。アタシだけが永遠の幸福の中にいるの。アナタが幸福を与えてくれたから」
「だけど、嫌だよ。僕のせいだ。僕は自分自身の、僕自身の願いだから……」
「物語はひとときの夢。小説の中で生きてはいけないよ」
「だけど、僕だって、きっと……」
「悲しまないで。物語にエンドマークが打たれたら、アタシたちは永遠の幸福なんだよ」
ケナは僕の首に腕を回した。
唇に唇が寄った。
しかし、彼女の唇の柔らかい感触を受け取ることはできなかった。そのかわりに頬に熱い涙が
た。ケナの涙なのか、自分の涙なのかわからなかった。
手の中は誰もいなくなっていた。
――ああ、ああ……。
振り返ると、こころねと頷いた。
「どこかへ行ってしまったよ」
彼女に向かって言った。

○

気がつくと僕は部屋の床（ゆか）に転がっていた。

――ん？……ああ？　何だっけ……？

阿九里は身体を起こした。右隣（みぎどなり）に絢、左隣（ひだりどなり）にころね。両隣の二人とそれぞれが気を失って転がっている。

――そうか。罰（ばつ）で本の整理をしていたら、本が崩れて……。

そして、僕の腕の中にはけいながいた。阿九里にまたがるようにのしかかって、邪気（じやき）のない眠そうな目を見ている。

「あーちゃん、おはよ」

「おはよ……って、何があったんだっけ？」

阿九里はけいなの頭を撫でながら、妙に脳裏（のうり）にひっかかる何かを思い出そうとしていた。

「何もなかったよ」

けいなはそう言った。くりくりした目で阿九里だけを見つめている。

「うん……。君が言うんだからそうなんだろうけど、ねぇ。どうして君のことがとても残酷（ざんこく）に見えるときがあるんだ」

阿九里はそう言った。



けなは何もわからない、というように目をぱちくりとさせる。
「今は、そんなことないよ。でも、あちゃん、浮気は回向けだからね」
そう言ってから、けなは阿純に抱きついた。
「京介、なんだ、それ？　していないし、そもそも付き合ってないだろ、僕……」
阿純はけなに押し倒されるように後ろに転がった。
その音で家族たちが起きだしてくる。
「ん……なにかひどい悪夢を見ていたような……。って、京介、何をしている！」
「あっ！　心配になって来てみれば、やっぱり阿純はまたその女とくっついて！」
「で、誰ですか？　周囲の空気を一気に冷やせるという芸人の真似をしたのは……」
「あ、みんな起きてきた！　ねえ、すごいよ、本当に付き合ったんだよ、どおって！」
けなは両手を大きく拡げてそう言った。

○

それからしばらく、阿純の脳にひっかかるものを感じながら日々を過ごした。
その違和感はやがて消え去ってしまったが、阿純はそれまでと違う習慣を身につけていた。紙の本を手に取るようになり、少しだが物語を読むようになったのである。

そして、紙の本をめくるたび、どういうわけか、胸が締め付けられる想い（おも）がすることに気づいた。

ハッピーエンドの物語を読むほどにそう感じるのだ。

「僕は何を読もうとしているんだろう？」

誰に問うでもなくつぶやくと、風がページをめくってそれに答えたような気がした。

4　邂逅の後

仕方ない。邂逅すなわち妖しく罠に囲まれた四年の年月の中、その少女は老いていた。

年齢はまだ十歳ほどか。しかし、その四年の年月は彼女の年齢には明らかにそぐわないものだった。何の

マナスクリーン。映像の中の年月があるのはそれだけ。

あまりに、潤いのない四年。

「乾燥ってのは、物語を突き詰めた後の姿を読んだ際、唯一の感想なわけよ。なんつってね」

少女はマナスクリーンに向かってそう言った。そのスクリーンには三人の姿が映っている。四年の歳月の机の配置、そしてスクリーンに映り込んだ別の男たちの姿から察すると、三人は会議に参加しているようだ。

そして、隣のスクリーンに映っている映像。明らかにその三人の一人である。

彼女の正体こそ、コードネーム『2V』。望一郎の配下として諜報活動に属し、現在はその権力の中枢に到っている人物である。何者の三人と同時に操る戦略スパイの組織の異国の工作員――キスパートCIM08のメンバーですら、彼女の素顔を見たことはない。

《三人の会話は良い。それが会議の何の関係があるというんだね？》

三人の会話の一人が、苛立った声をあげた。

「いや。敬意は怒らない。怒らない。関係もあり。使い方を目撃したもので」

2Vは、さらに別のスクリーンを持ってくる。そこには『コンスタン[illegible]像が映し出されている。
の[illegible]が[illegible]あるのだ。
《[illegible]実際に通る[illegible]、例の神デバイスには防御装置として組み込まれているが……》
「[illegible]中は[illegible]は何もない。外から持ち込んだものを自由に配置することはできますが、故に[illegible]人を殺すと
か、そこに誘い込んで抹殺するとかは、防御システムとして[illegible]は[illegible]思考です」
[illegible]ぬ[illegible]2Vは[illegible]、いや[illegible]の[illegible]はないのかもしれない。
《それが？》
「どうやら魔王の……[illegible]、いや[illegible]共振する[illegible]によって、[illegible]影響を与えることが可能らしい
です。え、つまり[illegible]拉致してくれば、[illegible]か、[illegible]か、そういう概念を[illegible]持ち込むことができ
るってことです」
《いや……[illegible]は[illegible]きないのだが……》
「ま、難しい理屈は[illegible]しましょう。[illegible]言いますと、[illegible]中に入るとか、ゲームの中に入るとか、そんな
ですわ」
《それで、学と……？ いや、だが[illegible]……》
「はっ、はぁ！ [illegible]言ったはずですが？ [illegible]ルールを決めることができるフィールドが[illegible]んです
よ？ そこに入り込んだ[illegible]……って[illegible]ってことです」
2Vの[illegible]は2Vの[illegible]沸く

《そうか……！　それで殺せるってことか……》
《次の神は犠牲に怯えずに済む！》
《お前の命も助かるぞ。これで、崇拝者の勢力拡大を抑えることができる》
「そういうことです。作戦の実行を任せていただきたい」
2Vは周囲の人間に作戦の指示を与え、人形たちを下がらせた。
「さて……。細胞を培養するのは簡単じゃないけど……こっちから行って手もあるからね。なんにせよ。ラバーズの持ち帰った紗阿久斗の細胞は役に立ってくれそうだ」
2Vは飾りのない白いシャツのそでをまくって、黒いスラックスの足を組み、マナスクリーンにかった。

あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎です。

六巻目をお送りします。本格的なお話です。しかしながらコメディと考えれば、むしろこれが

でして、こんなことばかり繰り返すのが作者の書き出した当初の基本だったような気がします。

とはいえ、本格とはいいつつ、テーマとしては妙に重要なものになったような気がしま

す。気ままに書いているところもあるもので、気楽に書くというのも大事なのだと、今さ

います。いつも適当に書いているって？ それは否めない。約束。

あ、もう六巻とはいえ、これだけ続いても大丈夫な作品になっております。なぜだか手に取ってい

まった人は、是非。

続いて他メディアでの展開のご紹介。

CDドラマ、株式会社ビートニクス様より[illegible]発売しております。続編もリリースされるかもしれ

ませんので、是非。

そして、伊藤さんのコミック版[illegible]り、単行本第[illegible]巻も発売中です。本書の隣に置いてある書店もあるかと。
に買ってくださいませ。

そして謝辞を。

イラストの[illegible]壱さん、今回も様々に趣味に走ったシーンが多く、それが想像を超える形でイラスト化さ
れていたので、ニヤニヤしております。あ、お引っ越しおめでとうございます、今度伺い
ます。

担当のO橋さん、常時遅れる書き手として安定してきたような気もしますが、スピードアップを心がけ
て生きていくことにしておりますので、次回もまたよろしくお願いいたします。

そしてドラマCDをはじめ関係者の皆様にも感謝を。毎回お世話になっております。

さて、次回の[illegible]巻も新展開ですよ。な、わけで、まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151―0053
東京都渋谷区代々木2―15―8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部　気付
[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（HJ文庫）。
『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『A－TEAM』主催。
広島カープファンなのですが、最近は横浜ベイスターズに詳しくなってきました。
本気のファンには申し訳ないが、豪快な負けっぷりが素敵なのです。ノーヒットで４点とられたりして魔法みたいに負けるんだぜ！　びっくりするほどベイスターズ！

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
<一言>
一般誌で何という物を描かせるんですか！
それはさておき、秋田書店様よりコミックス版「いちばんうしろの大魔王①」発売中です。よろしくお願いします。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 6

2009年6月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8